

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
August 2012

No.10

【特集】

失われゆく知恵、未来への継承

失われゆく“昔の知恵”の継承のための課題・方法を探る座談会「自然と人と社会のつながり方」、寄稿「私たちの取り組み」の他、交流の場としてコミュニティカフェを紹介する新企画「JOINT café」を誌上オープン。よりよい未来に向けて、私たちのできることを足元から見つめ、考える。



東 日本大震災後、小児科医として、NPO法人 HANDS や日本ユニセフ協会の支援活動に継続的に関わり、岩手県陸前高田市において予防接種や乳幼児健診の再開などのお手伝いをさせて頂いていた。津波で流された町並みを歩きながら、私はインドネシアのアチェ州での経験を思い出していた。

2008年、文部科学省の「世界を対象とした二対対応型地域研究推進事業」の共生人道支援研究班として、インドネシアでインド洋地震津波の災害支援活動に対する学際的評価を行った。アチェ州においては、被災後3年半の間に、10万軒以上の恒久住宅の建設が行われた。これだけ大規模な住宅建設が緊急支援として集中的に行われたのは、おそらく人道援助史上初めての出来事であった。

台湾の慈済仏教会が住宅建設を支援した村では、津波で家族を失い、避難所で伴侶と出会い、いま2歳になる子どもをもつ家庭を訪問した。災害で受けた悲しみを乗り越え、信頼できる夫のそばでわが子を抱く女性の姿には、家庭を築くたくましさを感じた。すべてが新しく建設された村にもかわらず、自分たちで植えた樹々も濃い緑の葉が繁り、表通りではすでに小売店もでき、おしゃれなカフェも開店していた。震災前にはなかった新しい生活が、確かに芽生えつつあった。

災 害時の緊急支援とは、人びとの生活状況を単に復興前の状態に戻す復旧作業ではなく、必要なものを新しく興隆させることも含む概念である。インド洋津波災害において、インドネ



ユニセフが支援した小学校を訪問(インドネシア・バンダアチェ市)

ビルド・バック・ベター —アチェの経験に学ぶ

大阪大学大学院人間科学研究科国際協力論講座

中村 安秀

シア政府は被災後4か月を待たずに、大統領令でアチェ・ニアス復旧・復興庁(BRR)を4年間の期限付きで設立した。BRRの局長は、「津波で亡くなった方々への鎮魂のためにも、私たちは被災前よりもいいものを作り上げるのだ(ビルド・バック・ベター)」と語っていた。

ビルド・バック・ベターとは、自然災害をグローバルな視点から捉え直し、環境に配慮し、社会の回復力(レジリエンス)を促し、災害を軽減する対策を盛り込み、持続可能なコミュニティを再生する試みである。産業や経済の復興をめざしつつ、住民の生活の質や社会的弱者への公平性を配慮し、住民が主体的に参画する過程を重視している。インド洋地震津波支援における国連事務総長特使のクリントン元米国大統領は、災害前にすでに存在していた社会の脆弱性や不公平さに慎重に対処しながら、被災地に外部から駆けつけた支援者とともに、新しい社会を創造していくことの意義を強調した。

阪 神・淡路大震災以降、災害後のケアにおいて PTSD (心的外傷後ストレス障害) が大きな課題になっている。災害で大切な家族や財産を失った方々に対する心理社会的ケアは、長い時間をかけて地道に取り組んでいく必要がある。

一方、最近では、トラウマ後の成長(Post-Traumatic Growth: PTG)という概念が提唱され、大規模災害のようなトラウマを引き起こす出来事を経験した人が、その後に示すポジティブな変化が注目されている。自然災害の被災者を対象とし

た研究では、災害後、被災者間で協力しながら対処した経験に基づき、新たな人間関係を築き、以前よりも他者を思いやる気持ちが強まったという。自分と同じようなつらい経験をした者に対して共感を示すようになったという変化もみられる。また、被災以前と比べて、ささいな日常の出来事に人生に対する幸福感を感じるようになった被災者の存在も指摘されている。

大きな災害を経験したあと、家族の重要性を再認識し、家族間の関係がより親密になったという報告は少なくない。阪神・淡路大震災の時も、幼稚園児をもつ家庭を対象とした調査において、震災前に比較して家族の絆が強まり、子どもがお手伝いするようになった、と報告されている。自分が経験した苦悩と悲嘆をばねに、生活を再構築していく過程で新たな進路を見出し、意欲的に取り組む姿もみられる。単なる回復力にとどまらず、被災した人

びとも成長していくという研究成果は、私たちに将来への希望の灯をともしてくれる。

東日本大震災の被災地においても、被災者同士あるいは外部からの支援者との間で新しい人間関係が築かれ、被災前には見られなかった新たな取り組みがすでに始まっている。自然災害が個人や社会に与えるすさまじい衝撃と甚大な被害と同時に、それに毅然と立ち向かうことのできる人間の勁きに信頼を寄せて、子ども、若者から高齢者まで、さまざまな世代が「共生」できる社会の復興を期待したい。

●なかもら・やすひで
大阪大学大学院人間科学研究科教授。専門は国際保健学、母子保健学、難民保健学。主な著書に『国際保健医療のお仕事 第2版』(編著・南山堂2008)、『国際緊急人道支援』(編著・ナカニシヤ出版2008)、『グローバル人間学の世界』(編著・大阪大学出版会2011)などがある。トヨタ財団国内助成プログラム選考委員長。

August 2012
No. 10



Photo by Tony Taniuchi

歌舞伎に使われる道具に「鹿の子(かのこ)」と呼ばれる布の髪飾りがあります。いろいろな色があり、役によって使い分けられます。ほのかな浅藍色に染められた鹿の子の上にあるのは、やはり歌舞伎で使われる風車のかんざし。今、これら美しくも貴重な伝統芸能の道具をつくる知恵と技術の継承が危うくなっています。関連した記事は16ページをご覧ください。

CONTENTS

FIRST WORD ● 中村安秀

ビルド・バック・ベター —アチェの経験に学ぶ 2

特集：失われゆく知恵、未来への継承

【研究助成プログラム 座談会】桑子敏雄 × 鏡啓記 × 李春子 × 由井英

知る、する、作る、自然と人と社会のつながり方 4

私たちの取り組み—研究助成プログラム助成対象者からの寄稿

2008年度助成対象 ● 鈴木正義

フィルムに刻まれた歴史から未来をみつめる 12

2009年度助成対象 ● 西原智昭

文化多様性と生物多様性のバランスを 14

2011年度助成対象 ● 田村民子

「伝統芸能の道具」の魅力と直面する課題 16

2012「東日本大震災対応」

プロジェクトマップ 18

活動地へおじゃまします!

「私たち」のために行うことが「私」のため 20

【「私」のまなざし】④ 喜多千草

文化的アイデンティティと多言語活用の間で 24

JOINT ホット・インタビュー ● 合田正樹

自然と人と技術の

「ハイブリッド農業」をめざして 26

JOINT Café 30

第一回 洗足カフェ

トヨタ財団ジャーナル 32

●2012年度東日本大震災対応「特定課題」<夏助成>の助成金贈呈式を開催

●研究助成プログラム、アジア隣人プログラムの応募状況、他

知る、する、作る、 つながり方

失われゆく過去の知恵を
再発見し、継承するために
私たちにできることは何か。
よりよい未来の構築のために、
研究の「向こう」を見つめながら、
東日本大震災以降の自然と人の関係の
あるべきかたちを探る。



鏡啓記
Keiki Abumi

Toshio Kuwako
桑子敏雄

Lee Choon Ja
李春子

Suguru Yui
由井英

——本号の特集は「失われゆく知恵、未来への継承」というテーマを掲げています。いささか大きすぎるテーマかもしれませんが、あまり構えず、できるだけ自由闊達な議論をお願いしたいと思っています。本日ご出席いただきましたのは、研究助成プログラムの現選考委員長である桑子敏雄先生、それから今まで助成対象者となって活動をさ

れてきた3名の方々です。司会をお務めいただく桑子先生はじめ、皆さんの研究活動の共通点として、過去の人々の知恵から現代の私たちが学べることは何か、とりわけ自然と人の向き合い方、その関係の再構築といったことに着目してプロジェクトを進めてこられた方々です。それでは桑子先生、よろしくお願ひいたします。

自然を感じる力と 物語の伝承



桑子 桑子です。ご紹介がありましたように昨年度から選考委員長をしています。トヨタ財団の助成としてどのような研究活動に助成をするのが良いか、財団の目指す方向と社会の進むべき方向を考え合わせながら、いろいろと議論を進めているところです。

私自身は東京工業大学で教えております。哲学、倫理学が元々の分野なんですけれども、いろいろ経緯がありまして、環境に関わる公共事業の、行政と住民の対立紛争を解決するための社会的合意形成の問題に、さまざまな現場で実際にファシリテーションとかアドバイスをしながら携わってきました。

私がこれまで携わった一番大きな公共事業と言いますと、斐伊川水系の治水事業で、そこに出雲の神話の世界が大きくかかわってきます。スサノオノミコトを祀った神社がたくさんありまして、治水上の要所に鎮座しています。河川の流域なんですけどね、洪水になりやすい場所、丘陵が狭窄しているようなところで、のびた尾根の末端が杜になっていて、そういうところに神様が鎮座しているんです。李さんの研究と話がつながりそうですが。

李 桑子先生は今、治水と神々の文化とおっしゃいましたが、アジアには共通して水と森といえますか、木々を敬う文化があったように思っています。

水はいまでもなく「生命」に恵みをもたらすものですが、洪水など災いのもとにもなる二面性があるって、その両方のコントロールといえますか、バランスをとる「知恵」として、また、自然と人との関係のあり方として、「森・杜」にアジアは注目してきたのではないかと思います。たとえば、韓国では海沿いや河川には必ず木を植えることを500年にわたって続けてきたわけなんです。面白いのは、風水とその神概念が結びついて、人工的に作られた森に必ずその土地の神様を祀る祠を建てるということがあるんです。また台湾では、ご存知のように200〜300年の移民による歴史があって、まず村を開くときには必ず木を一本、水路を中心に水を守るものとして植えるとい

う風習があります。

必ずしも生態学的な環境保全という観点からだけではなく、何と言いますか、そこには木とともに生きるというか、身体つまり五感によって「自然」というものを感じとる力を重視する文化がある。韓国ではご神木が枯れたりするようなことがあったら、それは村全体の危機だととらえていたのです。科学的に説明が可能かどうかということの前に、ご神木になっている老木が枯れるというのは環境異変、たとえば干ばつとかの自然災害の予兆ではないかと考えられていました。古い木がおかしいということになったら祭りをやりなおしたり、その木をなんとか保持し大切にしなければならぬというのが昔からの知恵、教えとしてあったわけなんです。危機のときはもちろんですが、平時からコミュニティ全体でそういう神木を敬う気持ちが共有されていたのです。そういう文化、自然とともに生きるという生活習慣は、アジアに共通のものとして少し前まではどこにでもあったと思います。

桑子 とても興味深いお話です。次に鏡さん、魚醤というところで、「食」がテーマですね。

鏡 秋田に「しょつたる」という魚醤があります。それは、秋田でたくさん獲れるハタハタとか、小さなアジ、アミ（小さな海老）などで作ります。かつては魚があまりに大量に獲れるものですから値段がつかなくなつて、捨ててしまう可能性のある魚を塩で漬けて作っていたんですね。秋田では「しょつたる」という名前前で、能登半島では「いしる」、瀬戸内海に行くとき「いかなご醤油」と呼びます。

桑子 そもそも「しょつたる」って、どういう意味なんですか。

鏡 当て字だと思うんですが、「しょつたる」は漢字で塩魚汁と書き作ります。お醤油の代わりといえますか、お醤油がない時代から利用されてきました。日本では、大豆で作る穀物醤油が主流ですが、地方に行きますと穀物醤油が高くて手に入らないとか、製造技術がないという時代があって、漁村なんかでは「しょつたる」を普通に使っていたようです。

これが現在、秋田県でも極めて少ない生産量になってしまいました。明治時代にはかなり数が多かった業者も少なくなつて、家庭で作られ

●桑子敏雄(くわこ・としお)
東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。1989年東京工業大学工学部助教授、1996年東京工業大学大学院社会理工学研究科教授、2002年～2003年フランス政府招聘によるフランス国立社会科学高等研究院客員教授、2009年～2010年中国大連大学客員教授。専門は哲学、合意形成学。主な著書に『環境の哲学』(講談社学術文庫)、『感性の哲学』(NHK ブックス)、『風景のなかの環境哲学』(東京大学出版会)、『空間の履歴』(東信堂)などがある。



ることもほとんどなくなり、「絶滅危惧調味料」の一つになってしまった観があります。

それをもう少し増やせないかとか、次の世代、未来に残せないかと思いい、国内の実態、アジアの実態を調べて、食文化継承のプラスになっていく方向、マイナスになっていく方向を考えてみようということ調査をしたりしています。

桑子 味わいながらの調査、楽しそうですね。では、由井さん。

由井 私は現在、土地に根ざした伝説や昔話などの物語に注目しています。具体的には諏訪大社の縁起になっている「甲賀三郎伝説」を紐解きながら映画を制作しているところです。

その物語のなかに御神渡りのことがでてきます。地元では御神渡りのことを御渡りと呼んでいます。御渡りは、冬に諏訪湖の湖面が凍結し、体積が膨張することで割れ目ができ、それが小さな山脈のように盛り上がる自然現象をいいます。今年は4年ぶりにその現象が現れ、われわれも取材することができました。

御渡りは、諏訪大社と深い関わりのある神様が渡ったしるしであると考えられています。毎年の気象条件で水の筋のでき方も一様ではなく、筋の始点、終点、方向などから三つの大きな筋を「御渡り」と判断します。行事を通じ地元の方々との関わりを深めて行くにつれ、この自然現象を実に500年以上毎年欠かさず記録していることを知りました。「御渡帳」という古文書を読むと、当初その現象のみを記録していたものが、年を経るごとに作物の出来具合を記録したと考えられる

ら命を守るために高台のお諏訪さんに逃げることは、近隣に住む人たちの古くからの言い伝えであったことも知りました。単純に諏訪信仰との関わりだけで、この作品に陸前高田を盛り込むことはあまりにも軽率と思いつつも、これをきっかけに改めて今回の災害のことを映画を通じて考えてみたいと思うようになりました。

不思議なことですけど、桑子先生がおっしゃるようなことが実際にあるんですね。さらにそこには、先人からの知恵を私たちがどう受け止め、次の世代に引き渡すことができるのかという、言わば「知恵の伝承」という問題が含まれているのではないのでしょうか。これはまさに現代人のわれわれに突きつけられた課題です。



問題に気づき、発信し、共有するために

桑子 たしかにある面で、日本の伝統的な宗教というのは土地の神話にもつながっています。あまり単純には言えないけれど、それが昔の知恵のひとつのあり方だったのかもしれない。しかし神話といって一方では、現代の「安全神話」というのもあつてですね、これが昔からの知恵に対する一種の忘却装置として機能するという皮肉な状況があるわけです。

おそらく、みなさんにとつても、そういう昔の知恵の伝承を考えると、それを忘却に導く圧力みたいなものがありますよね。時代の变化、社会の変化という要因もある。そういうことも考えながらどういう風に知恵を継承し、その重要性を発信していくか。そのあたりのこと、どのように考えますか。

李 たとえば、東北の被災地に桜の木を植える活動など、これが100年たつたら、新たな杜として、大切な場所の記憶を留めた自然の記録として、伝承の役割をはたすのではないかと思えます。そのような行いが、日本やその他のアジアの、自然と人間が共生するための知恵のひとつの伝統のような気がします。

しかし一方で、私は台湾と韓国と日本の神木のある所をずうつとまわっているんですけど、沖縄の調査のときに、でいこの木が危機的な状況だったことがありました。石垣島と竹富島ではでいごを何とか救

記述が出てきます。江戸時代になると、たとえば浅間山の噴火などによる災害の記録が長文にわたって書き綴られています。神様がどう諏訪湖を渡ったかというところは信仰の上でも御渡りの大切な姿ですが、その背後にある、人が自然の変化を敏感に感じ取り、それを克明に記録しようとしてきた姿を目の当たりにし、とても感銘を受けました。

われわれは昨年、東北を中心に途方もない規模の災害を被ったわけですが、そのことを併せて考えるとき、改めて自然を前にしたときの人間の無力さを感じざるを得ません。しかし無力だからといって人は自然に対し何もしてこなかったわけではありません。「御渡帳」は、人が自然に謙虚に寄り添いながら、その細やかな変化を感じ取ることの大切さを伝えているように思います。特にそうした先人の知恵を広く伝えたいと願って、映像の制作をしているところです。

桑子 諏訪の神様は日本神話でいうと出雲由来で、相撲をとって負けたという神様ですよ。出雲の神様でいうと、私はサノオとずいぶんいろいろお付き合いしてきて、東日本大震災の被災地の出雲系の社はどうなっているかなと250カ所くらい調べてみました。すると、伊勢系の社に比べて、出雲系の社はほとんどが無事でした。

ご神徳という、地域の人たちが神様に來ていただくときに、どういう神様に來ていただくかという地域のニーズがあつて、やっぱり災害に強い神様、災害から守つてくださる神様はこういう場所に來ていた。だくのが大事なんだ、という思いがはたらいたのかもしれない。サノオの社はだいたい津波の水がくるギリギリ上くらいのところにあります。そこに逃げればじつさい助かりますし、そこから眺めれば洪水の状況が全部監視できるつていうようなロケーションに社があることが多いんです。

由井 じつは私も御渡りが災害の記録でもあつたということを知ることにつれて、いま日本で起こっていることを自分なりに受け止め、それを今回の映像作品に盛り込む必要があるのではないかと考えるようになりました。そんなあるとき、人づてに陸前高田市にも諏訪大社の末社があり、高台にある境内に逃げることで自分たちは助かったんだというお話を聞いたのです。実際に取材に訪れたときに、「お諏訪さんに助けられたのよ」と涙ぐみながら話す人に出会いました。また津波か

おうと動きがありました。沖縄本島では「また、咲くさ」とか言つて、行政のほうにも、あまり危機意識がなかった。で、そのこと自体に私は焦燥感がつり、でいごをみんなで守ろうと呼びかけ、シンポジウムを開いたんです。そうやって、行政なり、地域なりいろんなところに発信すると、それが大きな流れになって、みんなでがんばろうと、力を合わせて、救済運動や募金活動が起きたんですよ。それで今はまた、でいごの花がちゃんと咲くようになってきました。

桑子 沖縄にでいごがなくなつたら大変なことですよ、島唄が歌えなくなつちやいますしね(笑)。危機的な状況に気づいて、行動を起こすきっかけをつくるのは大事なことです。シンポジウムを開いたり、行政にはたらきかけることは、その気づきを人々に広めることになる。ところで鑑さん、魚醤という目に見えにくいものについて、誰がどういう風に気づきをうながし、伝承するのか。危機的な状況にある魚醤文化をどう伝えていくか、なかなかむずかしい課題でしょう。魚醤の研究活動のなかで、行政に働きかけたりとか、問題を共有したりする活動もされているんですか。

鑑 しています。行政に働きかけたり、世界魚醤フォーラムを開催してマスコミと一緒に情報を発信したり。また、秋田県には総合食品研究センターがあるので、その研究員と一緒に活動したりもしています。それから産地として有名な男鹿半島では、市役所の人と一緒に魚醤復活のための作業を行つたりしています。

桑子 その成果は？



●李 春子(イ・チュンジャ)
関西大学、神戸女子大学講師

【トヨタ財団助成実績】2001年度「東アジアにおける森の信仰の現象学的考察—日本・台湾・韓国を中心に」(個人研究)、2007年度「東アジアにおける「杜(もり)」の文化の考察と情報化」(個人研究)、2009年度「アジアにおける鎮守の杜(モリ)の資料化—鎮守の杜の文化誌的鑑査・映像資料の作成」(共同研究・代表:波照間永吉)。著書に『神の木 日・韓・台の巨木・老樹信仰』(サンライズ出版)がある(本誌33ページ参照)。

鏡 徐々に出てきていると感じています。知名度は確実にアップして
いますし、東京のテレビ局が来て全国放送の番組で放映されたりも
しています。最近では魚醬を作りたい、ビジネスに参入したいという会社
が増えてきていますね。このチャンスを、なんとかうまくつかみたい
と思っています。

桑子 そのときに、どういう風に昔の作り方ですとか面白い方を発信
して、共有するかといった方法論について何かお考えはありますか？
鏡 そこがなかなか難しく。私たちのアイディア不足のほか、人脈、
人材不足もあって、なかなか決定打が出ない状態ですね。

桑子 魚醬文化を映像化するなんてどうですか。難しそうですけど。
由井さんは、過去の知恵や文化の継承を、どういう戦略のもとに、
映像を使って行おうと考えているのですか。

由井 映画である以上、一般の方に興味を持って見ていただけるのか
どうかをまず想定します。映画は見る人の立場や経験、興味などによつ
て見方が異なります。同じ映画、同じ場を共有しながらも、それぞれ
違うことを考えている。これは不思議なことですが、映画の特徴をよ
く表していると思います。最近では家庭でテレビを見たり、インター
ネットで動画を楽しむ人も増えて、映画館で映画を見る時代とは異な
り、映像を見るシチュエーションも多様になってきました。しかし、
映画を見ることによつて喚起された眠れる感情や考えをすくい上げよ
うとする場合は、まだないと考えています。そうした場を、私たちは遠
からず自分たちの手で作るつもりです。それは映画を見て終わりでは
なく、映像を見ることで始まる場と言えるでしょう。

桑子 なるほど、映画を上映して終わりということではなく、たとえ
ば議論の場を作るなど、映像の活用の方を考えているということでは
すね。では、映像として記録される中身の方はどうでしょう。いま、「動
画」という概念が大きな力を持っていますよね。動画は誰でも手軽に
撮れるし、それをインターネット上にアップロードできる。動画のア
クセス数が社会的な関心事になるような状況で、映画で記録しておく
べきコンテンツと、一般の人たちが身近にあるものを動画として記録
するというのと、その違いをどう考えたらいいでしょう。

由井 デジタル技術の進化によつて、誰でも簡単に映像が作れるよう
けに限らない。どんなテーマでも、研究をするにあつたての研究者の
モラルといますか、研究対象とのかかわり方の問題がある。私も合
意形成というようなことをやっています、だいたい私が行くような
ところは「お困り状態」にあるところが多いのですが、そんな私でも、
あんた何しに来たんだ、自分の研究のために来たんだろと言われる
ことがあるんですよ。データ貰ったら「はい、さよなら」なんだろう
と。じつさい、いわゆる客観的な研究をするだけを考えている
先生方もいらつしやいますのでね。

しかし、皆さんの地域に対するかかわり方は、そういう研究とはス
タンスが異なる。単に研究のための研究だけではないというか、まさ
に伝えるべき過去の大切な知恵が失われていくとしている時代に、
失われていますよというのを客観的に示していくだけではなくて、
危機を共有して解決策をみんなで考えていくという、そこまでを研究
の範囲に入れることが大事なんじゃないかと思っています。

李 私はこの座談会のお話をいただいたとき、まず企画の趣旨にたい
へん共鳴しました。失われつつある知恵、文化や風習の意味とか価値
とか、こういうテーマで問いかけることって、これまであまりなかつ
たと思うんですね。そういう視点を私たちのような助成対象者と共有
してこういういうか、研究の「向こう」の現実を見つめようとする姿
勢に、トヨタ財団の志の高さを感じます。

おっしゃる通りに、研究といつても私の場合、神木なら神木のデー
タを採ることだけが目的ではありませんから、現地に調査とかで行く

◎鏡 啓記(あふみ・けいき)
NPO 法人あきた地域資源ネットワーク
専務理事、特定非営利活動法人東北みち
会議理事長

【トヨタ財団助成実績】2009年「わが国
における魚醬文化の再評価のためのアジア
との比較研究—日本の伝統調味料「魚
醬」の復活をめざして」(共同研究・代表：
杉山秀樹)、2008年地域社会プログラム
「栗原の食の再現と次世代への継承プロ
ジェクト」(150年前の栗原の食復活プロ
ジェクト代表：小野寺健太郎)にも参
加



◎由井 英(ゆい・すぐる)
株式会社ささらプロダクション

【トヨタ財団助成実績】2007年「『村のこ
ころ』で受け継がれてきた『講』の知恵を
現代の地域社会に活かす—『持ち回
り・持ち寄り』で育む人の絆」(代表：小
倉美恵子)。2010年「なぜ、人は自然を
“保護”するようになったのか…。—
「ものがたり」がつかなく人と自然」。監督
作品として『オオカミの護符〜里びとと
山びとのあわいに〜』、『うつし世の静寂
に』がある。

になったのは、基本的にはとても良いことだと思っています。今まで
の映画製作は特殊な技術を持つ一部の人たちが担っていた作業です
が、みんなが文字を書くように手軽に映像を撮り、作品を作れるよう
になったことは大歓迎です。それによつて、新しいテーマや視点を持つ
た映画が出てくる可能性があるからです。

しかし、やはり考えてほしいことがあります。たとえば私たちがいま
作っている映画には、地域のお祭りに奉仕している人びとやインタ
ビューに応じてくださる人など「生の人」が映し出されます。それら
の地域の人たちと、どのように関わるのかということが大切です。撮
影でカメラを向ける前に、あるいはカメラを携えて地域に入る前に、
その土地の人たちとの信頼関係が映画作りの基本になくしてはなりませ
ん。作り手のモラルとして、映し出される人たちとの関係をきちつと
しないことには、決して良い作品にはならないと私は考えています。

映画はひとりで作れるものではありません。製作スタッフや映し出
される人など、さまざまな人の思いや関係性が映像に映し出されます。
自己満足のひとつの表現というよりは、さまざまな人の気持ちに立つ
て協働するというか、人の気持ちのなかに自分の表現を見つけるとい
うか、そういう心構えがまず必要なのではないかと思っています。



自然と神様、文化とビジネス、
研究と活動、それぞれの両面性

桑子 いまモラルという言葉がありました。それは映像の記録だ

と、じつさい、このままでいいのかと思う状況に出くわすことがよく
あります。

たとえば、日本海側に位置するある県のご神木の前を偶然通りか
かったことがあるんですけど、その写真を撮っていたら、撮っても無
駄ですよ、来週伐りますからつて言われたことがありました。樹齢
500年のタブの木だったんですけど、何で伐るんですかって聞いた
ら、道路を拡張したいからだ。その木が立つ場所が邪魔だったみた
いで、木にできた空洞が大きいとか、どうせその木はあまり長くはも
たないから倒れたら危ないとか、まあいろいろ言われて。

私はもちろん伐らないでほしいと懇願して、その木がまだまだ丈夫
なことを樹木医に調べてもらったり、マスコミに情報を提供したりし
ました。結果としては、伐採当日に悪天候になるなど、じつにさまざま
なことがあつたのですが、現在も伐られず残っている、というよう
なことがありました。その木は、ちょうど日本海に面した神社の入り
口にあります。また、神社の鳥居の位置が浜で、海から直接参道に入
るように建っていて、このあたりでは、鯨に乗って韓神が来たとい
う伝説があつて……。

桑子 私は、「神は鯨に乗って」というエッセイを書いたことがあり
ます。東尋坊の近くじゃないですか。

李 そうです！

桑子 その地の神主さんが伐つてもいいって言ったんですか。

李 最初は反対してみたんですけど、地域全体の流れがそうなつ
てしまったようで……。

桑子 でもね、それ止めるの、意外に簡単なことがあります。伐つた
ら祟りがありますよつて言ってみるといいですよ。まだ、日本人には
そういうことを恐れる気持ちが残っているものなんです。

李 何と非科学的な、そんな迷信を信じろというのかつて怒られます
けどね。

桑子 もちろん、じつさいに祟るかどうかわからないし、実証もでき
ないけど、祟りを恐れる気持ちがあるというのはまぎれもない事実で
すからね。その気持ちがあることが大切です。

鏡 よく、山でゴミを捨てられるところに小さい鳥居を建てること

あります。するとゴミをあまり捨てなくなる。そういうことと同じですよね。

李 祟りという言葉はきついかもしれないけど、目には見えない何かを畏れる気持ちというか、自分の良心の呵責というか。自然に対して申し訳ないとか……。

桑子 スサノオは、朝鮮半島から入ってきた牛頭天王ごずと同一視されることがある。これは疫病の神様なんです。だから、怒らせると恐ろしい祟りがある神様なんですよ。つまり恐れと同時に、この神様を大事にすれば助けてくださるという両面性を持っているんです。自然と同様に、両面があるからこそ敬つて大事にしながら、災害のさいのポイントとなると鎮座していただくというね、そういう昔の人々のメンタリティとか、地域のニーズがあつたつていう、そこが大事な点だと思います。

李 たしかに、ご神木に関連した伝説で最も多いのは、神木に危害を加えたら必ず何か災いが起きる、しかし危機的な状況、たとえば洪水とか戦争時に、木が人を守ってくれた、木に隠れて助かつたつていうお話なんです。恐ろしいと同時に私たちを守ってくれる、その両面があるところを忘れてほしくないと思います。

桑子 ところで、神様の両面性とは違いますが、伝統的な食に対する思いも、どこか似た点がありませんか。

鏡 ありますね。自身の気持ちにも、伝統的食文化の継承に対する両面性があります。たとえば、塩麴は昔から作られてきたものだけど今すぐ流行つています。韓国のお酒マッコリ同様に、美容にいいとか健康にいいとか、ちよつとしたきっかけで、異常なくらいのブームになつていいる。魚醤もそうなると思いいながら、一瞬の沸騰したような流行は一面だけが強調されたもので持続しないから、それは避けたいと思うところがあるんです。ですから、ちゃんと地に足がついた感じで魚醤を広められないものか考えます。

由井 地に足がついた感覚というのは、やはり大切だと思います。「食」の場合、とかく現代

何かやるというだけではなく、さまざまな方向から取り組みを手伝いたい。私たちが受けたのは「研究助成プログラム」ですが、現地調査して文献をいろいろ調べ、何らかの方向性を考えて、それをたとえば地域づくりのなかに組み入れたりと、伝統の食文化を伝承させるための手伝いをしたりとか、多方面に支援したい、お手伝いをしたいと考えています。トヨタ財団はそのことを非常に柔軟によく理解してくださるので、私たちの考えを具体的に推し進めることができます。



知る、する、作る、 そして残すことの重要性

桑子 ここまでお話をおうかがいしてきて思うのですが、研究というのは何かを「知る」ということですよ。でも、たとえば木を守る、映画で物語を語る、食文化を伝える、これらは「する」、**DO**ですし、「作る」です。この知る、する、作るというのがうまくつながつて、クリエイティブな方向に行くといよいですね。

李 作るということかというと、いま樹木誌図鑑を作ろうと取り組んでいるんです。アジアの樹木誌、文化誌の図鑑なんですけど。いまある植物図鑑は生態学的なものがほとんどなんです。でも、由井さんがおっしゃった物語ということでは、木にはそれぞれいろんな物語があるんです。私が調査をしている300カ所の木には、300の物語がある。それらを含んだ一つの総合的な樹木の図鑑にして、100年後もしその図鑑に出ている木が残っていたら、昔こういう物語があつたんだなあって見て知ってもらえるような図鑑を作りたい。そこに、政治的な思惑を超えた、アジアの自然にたいする共通の思いや文化を描き出し、次世代に遺したいと意図しているんです。それによつて、アジアの文化交流、平和にも貢献できないかと……。

桑子 物事を長い目で見るのが少なくなつていますね。巨木を育てる文化がないじゃないですか、いま。樹齢1000年の木をいま植えるように気が持たない。



は味覚にとらわれたり、体のためになる栄養効果の高いものを採り求める傾向にあります。それだけで良いのでしょうか。「食べる」とは、命を取り入れることだと思います。食を考えるときに、その土地ではどのように命に配慮して作られ、また感謝して食べられているのかという食文化を含めて伝えられるとよいですね。日本は自然の豊かなところですから、まだまだ知られていない「土地の作法」があるでしょうし、私自身とても興味があります。

鏡 その土地に綿々と伝わってきた日本の食文化とか地域の知恵があります。食を通じて、そういうのも学んでほしいですね。あまり頭でつかちなことは言いたくないのですが、日本やアジアの歴史や伝説を勉強しながら、ときに神様に手を合わせるとか……。物事の底流に多様なつながりを見出し、それをしっかりとしたものにするこのお手伝いができれば、と考えています。

桑子 いま、全国的なパワースポット・ブーム。私も「出雲」のお手伝いしていますけど、参拝客には若い女性、20代後半から30代の2、3人連れの女性のグループがすごく多いんですよ。彼女たちは、神様のことや宗教のことをよく勉強していて、正しい礼拝の仕方なんかも知っています。とても礼儀正しくて、お金も持っているからいいお客さんなんです。ビジネスとして地域が儲かるからいいと言っているだけではなくて、それが日本文化をもう一度真面目に見直そうというきっかけになつていいるのが、いいことだと思いいんですよ。

だから魚醤とかね、食文化もきつとそういうきっかけをうまく作ることで、それをもう一回多くの人たちが再発見できるんじゃないか。再発見のきっかけになるということが、とても大事だと思います。

出雲はぜんざいの発祥地とかで、ぜんざい屋さんが軒を並べている。それと、出雲そばですよ。ぜんざいとそばを売り出しているんです。それは出雲の神話や文化と味覚を、上手に融合しているつていう感じがしますね。美味しいものを味わうだけでなく、それこそ文化を食べたり飲んだりするつていう感じですかね。

鏡 そんな感じですね。やはり一方向からだけ

李 そうですね。たとえば建物とかは、工学技術があるので、やろうと思えばすぐに何度でも作れますし。

桑子 スカイツリーはすぐにできますけど、巨木はね、多くの時間の堆積が必要なんですよ。

李 数百年という、地球規模で見ればそれほど長くない時間を考えるということが、なかなか

かいまの社会にはできない。**鏡** そこに図鑑で「残す(遺す)」ということの重要性があると思うんです。先ほどお話に出たインターネットなどの動画つて、悪いんですけど、100年後に残っているものはほとんどないでしょう。でもさつき由井さんがおっしゃつたように、地域のことをきちんと調べて、地域の人たちと一緒に作業をする。そこに映像なら映画監督、本なら編集者というプロフェッショナルの人たちが加わつて作つたものはずつと残りますよ。残るものを作ろうという発想は、非常に重要だと思います。

由井 そういう意味では、知識と知恵には違いがあると思つていいるんです。「知識」は個人の力量に負うものである一方、「知恵」には他者との関係性が含まれていると自分なりに考えています。「恵み」という言葉に他者の存在を感じるのです。その他者の代表がなんといつても自然ではないでしょうか。人と自然との密接な関係から得られた恵みが知恵であろうし、そうした知恵を私たちはしっかりと受け止め、次に伝えて行かなければならないと思つています。

桑子 魚醤図鑑なんつてもできると楽しそうですね……。魚醤といつても、いろいろ味がちがうんでしょね。

鏡 ちがいますね。去年、秋田で世界はじめての世界魚醤フォーラムを開催しました。そんなことをやろうなんて、そして、じつさいできるなんて、だれも考えもしなかつたでしょうね。世界各地の魚醤を80〜90種類集めてきて、会場でみなさんが味わうこともしました。

桑子 それはいい。今度やるときは、ぜひ呼んでください(笑)。本日は楽しく有意義なお話をありがとうございました。

私たちの取り組み

— 研究助成プログラム助成対象者からの寄稿



2008年度研究助成プログラム

フィルムに刻まれた 歴史から 未来をみつめる

◎鈴木正義（グループ現代）

「助成題目」映像アーカイブ・プロジェクト「甦る記憶を農村医療と地域再生の礎に！」——佐久総合病院映画部が捉えた映像記録からの再発見



の農山村地域の過疎・高齢化にいち早く対応して、医療と福祉の垣根を越えた包括的な地域活動も実践した。

作品は、病院に遺されていた16ミリフィルムの記録に新たに収録したインタビューを交え、戦後まもなくから始まった農村医療の歴史を振り返るとともに、現代の医療状況を考える構成になっている。

倉庫に眠っていたフィルムが甦る

作品製作のきっかけとなったのは、トヨタ財団の研究助成部門で2008年度に助成いただいた「映像アーカイブ・プロジェクト」甦る記憶を農村医療と地域再生の礎に！——佐久総合病院映画部が捉えた映像記録からの再発見」だった。

映像アーカイブというのは、本でいうところ

ろの図書館のようなもので、膨大な映像資料を整理し、目録化する、いわば「映像の図書館」といったイメージだ。具体的には、佐久総合病院映画部で保存していた戦後間もなくからの16ミリフィルムによる「農村医療の記録」をビデオ変換しデジタル化する作業が中心だった。

プロジェクトが本格化し、病院地下の薬事

倉庫に眠っていた映像フィルムが甦ることとなった。しかし、映像フィルムに定着された「歴史」、あるいは「記録」はフィルム群をデジタル化するだけで簡単に甦るというわけでは決してない。いくらコンピュータが高度化されたからといって、映像フィルムに込められた膨大な記録内容が自動的にデータ化されて整理できるわけではないのだ。

撮影された時代、その場所に実際に立ち合った映画部スタッフが中心になってその記憶を遡り、ワンカットずつ克明にその内容を記述し、データ化するという、究極のアナログ作業を続けなければならなかった。古い映像を甦らせる最も重要なチカラとなったのは、そうした地道な、ヒトによる作業だった。

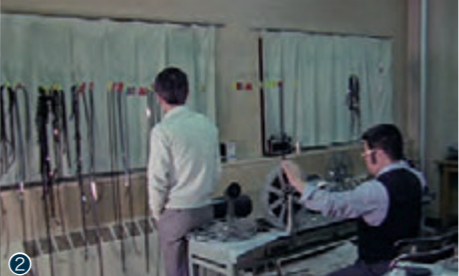
そうした作業の過程では、今さら眠っていた映像をひっくり返して何の意味があるのだ、と囁かれたりもした。そして、今を記録するからこそ今日のドキュメンタリーになり得るのだから、今を記録すべきではないの

に刻まれた歴史から未来をみつめる」という視点だった。我々が生きる「今」の背景には膨大な「歴史」が繋がっている。それを踏まえながら今日の課題を見つめてみよう、そう考えた。

そうした視点にはつきりと気付かせてくれたのは、インタビューに応じてくれた地域の方々だった。お話を聞きしてみると、昔の出来事を昨日のこのように鮮明に話してくださった。皆さんの心のなかに、そして生活のなかに明確に「歴史」が活かされているように思えた。しかも、話してもらった歴史的事象を整理中のアーカイブ映像のなかから探してみると、それぞれのものが動画で確認でき、書籍の中でしか知ることのできなかった「農村医療」の現場のディテールを目の当たりにすることができた。

私はこうした取材を続けながら、「今」をドキュメントするには「今」だけではなく、「歴史」をみつめる視点を持つことの重要性に気づいた。

映像アーカイブプロジェクトによって戦後まもなくから農村医療の現場を記録した膨大な映像が甦り、そのデータ化は今も続けられている。その過程で長篇記録映画「医者として」が生まれた。それは、映像に包含された「歴史」を「現代」に活かす一つの試みであった、と思う。甦った映像をもとに綴った農村医療の戦後史、それが少しでも医療や福祉の現場で現代の課題を考えるヒントになることを願っている。



- ① 講演する若月俊一
- ② 病院内編集室
- ③ 当時の編集風景
- ④ 佐久総合病院の病院祭り
- ⑤ 健康診断／ある村の健康管理
- ⑥ 出張診療／毎日世界ニュース(1958)

か！とも言われた。しかし、良くしたもので作業が進み、「出張診療」、「農村医学会」、「カリエス手術」、「全村健康管理」といった農村医療の歴史的エポックとなる映像が徐々に年代ごとに整理されてくると、そうしたフィルムに刻まれた「歴史」のなかに「現代」あるいは「未来」を考えるヒントが潜んでいるのではないかと考えられるようになった。さ

らには、映像のアーカイブ化は単に古い映像を保存・管理する機能に止まらず、いかに活用できるかを常に考えながら進めるべきなのだ、と強く思うようになった。

現代の課題を考えるヒントに

こうした段階を経て映画製作は始まった。そこで私たちが念頭においたのは「フィルム



文化多様性と 生物多様性のバランスを

◎西原智昭（野生生物保全協会コンゴ共和国支部）

〔助成題目〕象牙利用に関する日本伝統文化のあり方の再評価づけとアフリカ熱帯林・マルミミゾウの密猟に関する研究

マルミミゾウ激減の理由

日本では奈良時代より象牙が使われてきたが、庶民に広まったのは戦後以降、印材としての利用である。今でも象牙製の印鑑は小売店に並び、高級品として扱われている。日本の邦楽器の一部にも象牙が用いられているが、この利用も明治以降とされる。特にサイズの大きいものとして、三味線の撥が挙げられる。

象牙はいつたどこから来るのか。かつては、アジアゾウの象牙が中心だったが、戦後からアフリカ由来のものが流入し始めた。無論、象牙はゾウが死んだ状態でしか採取できないため、1960年以降、アフリカのゾウが激減し、そのため、1989年のワシントン条約で、象牙の国際取引は全面禁止された（極めて限定された条件下を除く）。

アフリカ中央部の熱帯林に棲息するゾウは、「マルミミゾウ」と呼ばれ、TVなどで馴染みのあるサバンナに棲む「アフリカゾウ」

とは異なる。森に棲み、さまざまなものを食べるこのゾウが、果実を丸飲みし、糞を通じてその種を散布してくれるおかげで、次世代の植物が芽吹き生育できる仕組みになっている。この役割等から、マルミミゾウは、その熱帯林生態系の維持と生物多様性保全に不可欠な「礎石種」と呼ばれる。

国際象牙取引が禁止となった今でも、マルミミゾウはその象牙を狙う密猟によって激減し続けている。20年以上、調査研究、国立公園管理、環境保全に関わる筆者も、その密猟を幾度も目撃してきた。

今日、熱帯材や鉱物資源を目的とした開発、開発に伴う道路網の発達やそれに付随する人口流入、内戦時に安価に出回った自動小銃の存在といった要因が、その生息域を狭めたり、密猟をより容易にしており、マルミミゾウの生存を脅かしているのである。

伝統文化継承と象牙の違法流入

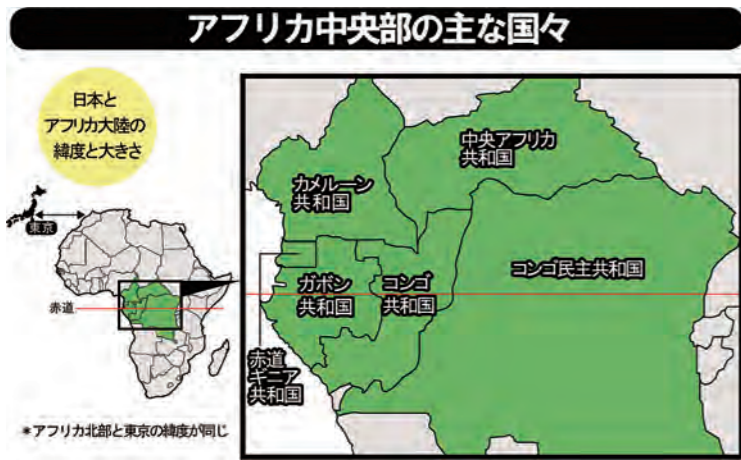
確かに、象牙需要国は日本だけではない。

象牙利用が伝統文化なのかどうか再検討せねばなるまい。印章にせよ三味線の撥にせよ、印章を彫る技術や、三味線を使用する文楽・歌舞伎などの芸能自体は、数百年という古い歴史を持つ「伝統」のうえにあることは疑いを得ない。しかし、一世紀程度の象牙「利用」自体を伝統文化とみなせるだろうか。

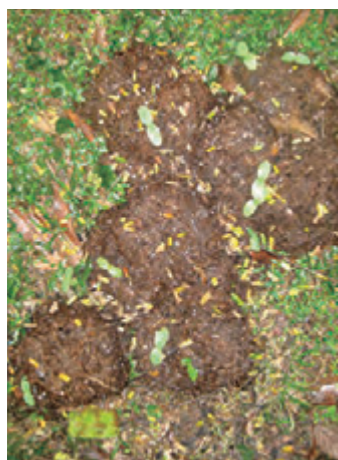
たとえ日本の象牙利用が伝統文化であると仮定しても、違法ルート以外に新たな素材入手方法がない今、その「未来への継承」は容易でない。そればかりか、違法、そしてそれが引き起こす生物多様性喪失の上に成り立つ事象を、文化として誇れるものかどうかの検証も必要だ。すべてがグローバルゼーションの下にある今、文化多様性も、生物多様性とのバランスのなかで議論されなければならないのである。

知らなかった、では済まされない

こうした現状を踏まえて、関係省庁は早急に象牙管理制度を改善すべきである。熱帯林を支えるマルミミゾウの激減を考慮すると、原産地別に登録する新たな象牙在庫管理制度



アフリカ中央部でマルミミゾウを保有する国々の地図



ゾウの糞からの芽生え



15kg相当のマルミミゾウの象牙(オトナ・オスの象牙で中堅サイズだが、今これ以上大きい象牙をもつマルミミゾウを見かけることは稀である)からでも、三味線の撥はひとつ作るのも困難であることを示す図

東アジアの一部の国々にも象牙需要はある。そのなかでも、日本の需要はマルミミゾウ由来の象牙に特化している。それは「ハード材」と呼ばれ、象牙を素材とする彫師達に「最高級」として重宝されている。

そこで、マルミミゾウの減少と、日本のこうした特殊需要との間に、関連があるのか、日本に象牙使用の伝統文化があるとして、もしそれがマルミミゾウの密猟を促しているとするれば、その伝統文化も再評価づけする必要があるのではないか、という疑問をベースに、2009年11月より2年間、トヨタ財団の助成金にて、調査を実施した。

調査でまず浮き彫りとなった問題は、マル

の確立が急務と言える。違法象牙をDNA鑑定あるいは象牙専門家による識別を通して、原産地別に分類・視覚化することによって、象牙利用者・中間業者へ、象牙利用のもとらす生物多様性への影響の是非が広く明快に認識されるのではないだろうか。

象牙管理方法において、日本はアジアのリーダーとなるべきである。象牙は、厳格で適切な管理下でこそ、生物多様性保全を保ちつつ、象牙利用という「伝統文化」を失わずして、「未来への継承」ができると思われる。

生息数調査を鑑みると、このまま密猟が継続すれば、早ければ5年、遅くとも10年以内に、マルミミゾウはほぼ絶滅する。マルミミゾウがいなければ、熱帯林の生態系も維持されず、我々は多くの生物多様性と地球の大きな「肺」を失い、気候変動もさらに加速化されるだろう。我々日本人は象牙問題を、こうした地球規模な視点から、急務の課題として検討しなければならぬ。

今回のトヨタ財団の助成金による支援（一部）で、2012年4月に自費出版に至った『知られざる森のゾウ——コンゴ盆地に棲息するマルミミゾウ——』（ステファン・ブレイク原著、西原智昭訳、現代図書）が、マルミミゾウの置かれている実情を多くの日本人に提供できる資料となれば幸いである（本誌33ページ参照）。知らなかった、では済まされない、日本人との深い関わりに言及した特別章も筆者によって書き下ろされている。まずは、情報共有こそが国民を巻き込んだ議論の素地を作ることと可能になると信じる。

〔写真・図〕西原恵美子

「伝統芸能の道具」の魅力と直面する課題

◎ 田村民子（伝統芸能の道具ラボ）

【助成題目】日本の伝統芸能に用いる道具類の希少技術を未来へ継承するための技術保存ネットワーク・プラットフォーム構築を目指す研究——衰退危機に瀕する能楽・歌舞伎の道具についての研究



歌舞伎床山の仕事風景。元結（もっとい）と呼ばれる紙製の糸を歯と手で巧みにあやつり、髪を結わえる。
イラスト：中川末子

材料・技術・道具が途絶えかけている

私の研究対象は、能楽や歌舞伎などの伝統芸能で使われる道具の技術継承である。具体的なフィールド、つまり調査でお会いするのは歌舞伎の裏方と呼ばれる人たち、能楽師（能楽では演じ手自身が道具類を管理している）、道具を作る職人だ。場所は主に東京。伝統芸能を「ものづくり」の視点からアプローチし、現場で困っていることを解決するために調査、研究を行っている。

私の本業は文筆業である。ひょんなことから歌舞伎の世界で仕事をするようになり、大道具（舞台のセット）、小道具、衣裳、床山、扇、足袋、かんざし、三味線など、様々な制作現場取材した。これらの道具の多くは精緻な手仕事で作られており、間近で見るとモノとしての魅力にあふれている。どんなに小さな道具も話を聞くと興味深いエピソードに満ちている。しかし現場を巡るうちに、これらの道具のなかには技術継承が危うくなっ

ているアイテムがあることがわかってきた。私は趣味で能を習っているが、能楽師の先生に尋ねてみると、能の世界も同様の問題を抱えているという。その原因は、道具の作り手である職人の高齢化、手作業のため効率性、収益性が低いこと、後継者が育てられないなど。また古来より使われてきた鷹の羽根やべつ甲、特殊な布地などの素材も年々入手しづらくなっている。道具類のわずかな質の低下も、積み重なれば総合芸術としての質は著しく損なわれる。文化庁や公共の団体による総合的な調査が進められているが、伝統芸能を支える道具は、舞台上で使われるもの他に、糸や針など陰で使われるものもあり膨大である。私自身は、公共の調査でこぼれがちな小さな道具や、現場に即効性のある支援を行うための研究を行っている。

伝統芸能は貴重な手仕事が集積したタイムカプセル

歌舞伎の裏方のなかに床山とこやまという仕事があ

に連携し合い、独特の社会を作り上げている。その絡み合いの豊かさは、ときどき小さな道具を介して顕在化する。たとえば床山が特殊なかつらを結うときに、ある糸を使うのだが、それは歌舞伎の舞台に出ている三味線奏者から使い古しの三味線の糸をもらおうという。また、床山の仕事場では毛くず（かつらに使われる人毛のくず）がゴミとして出るのだが、それを衣裳担当者もらって針山の中に入れて使う。髪の毛はほどよく油分があるので針のさび止めになるのだ。彼ら自身は意識していないだろうが、昔から伝わる知恵がそこかしこに詰まっている。

外の世界と連携するプラットフォームづくりが必要

私は今、裏方や職人が使う道具のカルテを

作り、それぞれの技術継承の現状をランク評価している。客観的な資料を作ることで、危機の状況を伝えやすくなると考えているからだ。

この調査方法は、生物学の絶滅危惧種を数値化し区分分けしたレッドリスト・データの手法をヒントにした。生物学の調査手法をお手本にするアイデアは、アフリカのコンゴ共和国で生物多様性保全に取り組まれている西原智昭氏（14ページ参照）との出会いに由来する。氏のプロジェクトでは日本の伝統文化で用いる道具の素材が重要なポイントになっている。そのため資料集めに私も参画したが、その際に調査手法についても学ばせていただいたのだ。

最後に伝統芸能の道具が抱える課題が解決した事例をご紹介します。

歌舞伎の床山が使う道具に「鹿の子かこ」と呼ばれる布の髪飾りがある。昔の親方が今から約40年前に大量購入し使い続けてきたが、近年ストックが枯渇。再度発注しようとしたところ作れる職人がいなくなっていたという。私は2009年にその事実を知り、新しい制作ルートを探し、1年かけて復元の橋渡しをさせてもらった。

伝統芸能の世界は古い因習も多く、外部の人間が関わるのが非常に難しい。しかし、伝統芸能の世界の複雑さに精通し、彼らの秩序を尊重しながら外部へ回路を開き、多様な職種とつながることができれば解決する課題は多くあると感じている。他とのネットワークを広げながら研究を深め、伝統芸能の道具を高い質を保ったまま未来に継承できるように、努力していきたい。



歌舞伎床山と京都の絞り職人（京都絞栄会）を引き合わせて復元した「鹿の子」と呼ばれる布の髪飾り。床山の親方・高橋敏夫さんと田村で出来映えを検討しているところ。★



復元した「鹿の子」。薄い絹に絞り染めの技法がほどこざれている。柄は麻の葉模様。★



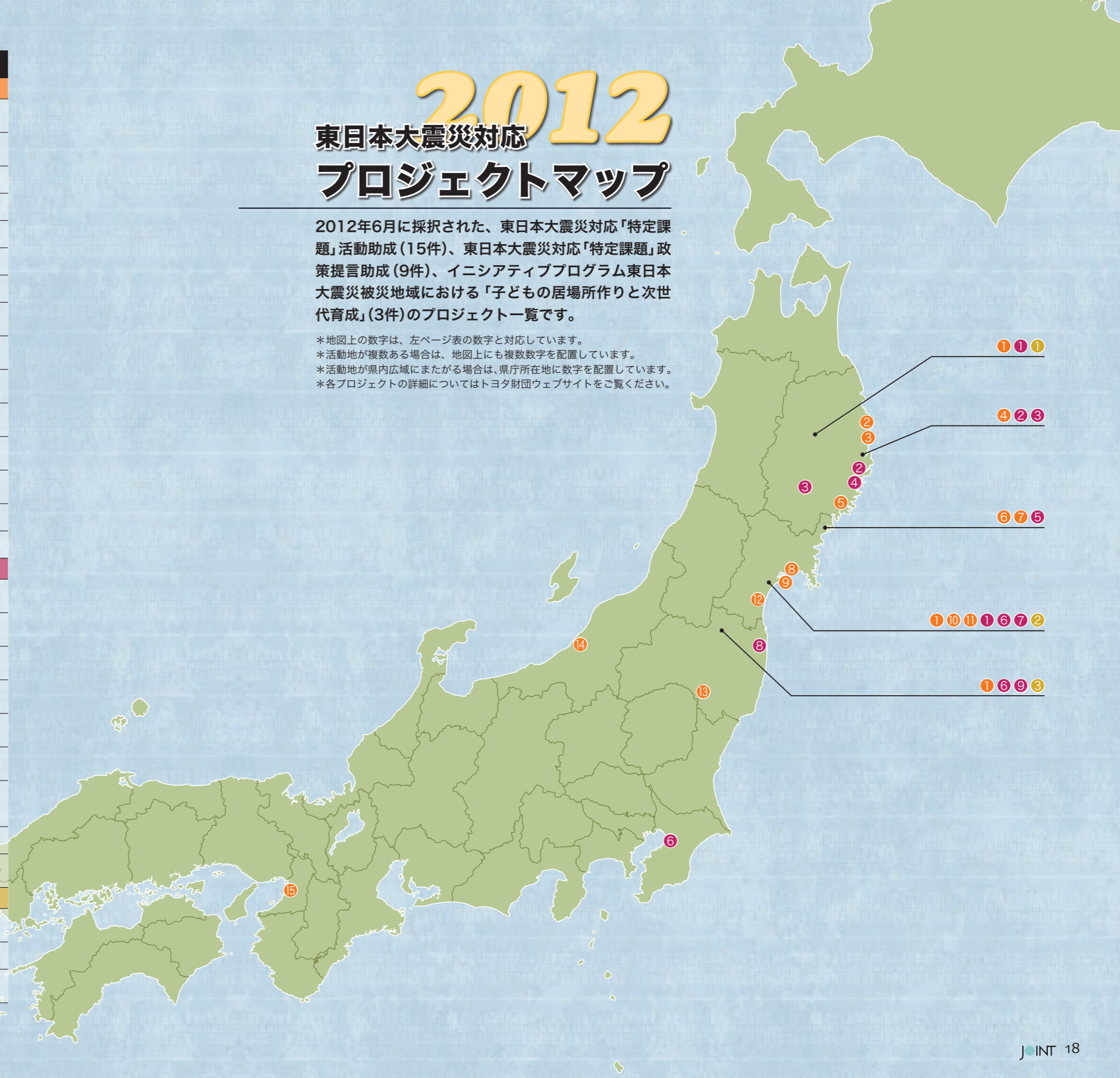
歌舞伎で使う髪飾り。これは女方（おんながた）と呼ばれる女性の役で使うもの。髪に飾るものも実に多くの種類がある。★

★ 撮影協力：有限会社光峯床山 / 撮影：トニー・タノウチ

2012 東日本大震災対応 プロジェクトマップ

2012年6月に採択された、東日本大震災対応「特定課題」活動助成(15件)、東日本大震災対応「特定課題」政策提言助成(9件)、イニシアティブプログラム東日本大震災被災地域における「子どもの居場所作りと次世代育成」(3件)のプロジェクト一覧です。

*地図上の数字は、左ページ表の数字と対応しています。
*活動地が複数ある場合は、地図上にも複数数字を配置しています。
*活動地が県内広域にまたがる場合は、県庁所在地に数字を配置しています。
*各プロジェクトの詳細についてはトヨタ財団ウェブサイトをご覧ください。



	代表者氏名	題目	活動地
東日本大震災対応「特定課題」活動助成			
①	金田 諦應	東日本大震災「心と命」のサポートプロジェクト	岩手県、宮城県、福島県
②	平澤 光昭	被災地商工業者の経済復興応援と街なか経済交流人口創出・被災地の観光復興の一役を担う「街の賑わい創り復興市」の開催	岩手県沿岸部
③	桑田 但馬	岩手県沿岸地域における「いのち・暮らし復興塾」の運営	岩手県沿岸部
④	黒田 陽子	被災地における市民活動の風土醸成のための、コミュニティ新聞づくり	岩手県宮古市
⑤	伊藤 怜子	巡回こそだてシップ	岩手県大船渡市
⑥	清水 敏也	気仙沼帆布を、地域ブランドへ育てよう	宮城県気仙沼市
⑦	星 美保	大沢地区コミュニティ施設再建プロジェクト	宮城県気仙沼市
⑧	佐藤 康男	おばちゃんパワーで島を活性化！「ちよっくら あがいん(in)宮戸島」—宮戸島観光情報広場と手作り物産品の販売	宮城県東松島市 宮戸島
⑨	内海 新一郎	ふるさと愛ランド—幸せの黄色い花と笑顔が咲き乱れる夢の愛ランド！	宮城県塩竈市 浦戸桂島
⑩	赤木 弘喜	「復興支援 ありがとう せんだい」プロジェクト—仮設住宅自治会活動へのアトム通貨支援事業	宮城県仙台市
⑪	飯塚 正広	住民主体の復興住宅提案づくりにおける新たな共助型コミュニティの構築と継承	宮城県仙台市
⑫	松島 宏佑	地元住民による「よそもの・わかもの」を活用した、「居場所」「チャレンジ」「地域の宝の発見」の土台づくり	宮城県亶理郡
⑬	大田 恵美子	福島県警戒区域住民の心の復興プロジェクト—農家の生きがいを求めて！シクラメン栽培への道	福島県白河市
⑭	徳嵩 加津美	“福島サロン”の運営と母子避難の声をまとめた記録集の作成	新潟県長岡市
⑮	柴田 亨	避難ママのための心のケア&就労支援事業	大阪府大阪市
東日本大震災対応「特定課題」政策提言助成			
①	三浦 広志	参加型による地図作成プロジェクトを通じた復興支援の手法の確立—OpenStreetMapによるクラウドソーシングと現地での地図化プロジェクト	岩手県、宮城県
②	岩船 昌起	復興公営住宅の住まいづくりとそれを取り巻くまちづくりへの提言—被災者の体力や行動と被災地の再建過程に応じた地域性の反映	岩手県宮古市、山田町
③	若菜 千穂	地域生活交通の維持改善における住民の組織化および合意プロセスに関する実証的研究—岩手県北上市および宮古市の被災コミュニティの比較検証	岩手県北上市、宮古市
④	渡辺 千明	東日本大震災被災地における木質災害廃棄物と地域木材活用プロジェクト—岩手県大槌町の地域再生に向けて	岩手県大槌町
⑤	桑田 仁	漁村集落におけるコンパクトな「集落内高台移転」の可能性：集落内就労・居住・交通を一体的に実現する方策の提案	宮城県気仙沼市
⑥	宮脇 昭	被災地における森の防波堤づくりプロジェクト提言のための実践的研究	宮城県、福島県、千葉県
⑦	宮西 悠司	住民の生活世界にもとづいた支援の視点からの対話と協働によるふるさと再生計画構築プロセス—安心自立共生のしなやかな復元力あるコミュニティ創成提言	宮城県仙台市
⑧	渋谷 健司	福島第一原発事故の保健医療制度に対する中長期的影響に関する研究	福島県南相馬市
⑨	佐藤 彰彦	東日本大震災後の地域復興にかかる重層的ガバナンス構造の再編に向けた実践的研究	福島県
イニシアティブプログラム東日本大震災被災地域における「子どもの居場所作りと次世代育成」			
①	山本 克彦	子どものエンパワメント支援事業—夢の実現につながる居場所づくりと学習支援	岩手県
②	山下 晋司	宮城県内の仮設住宅における「子ども未来館」の設置	宮城県
③	若月 ちよ	被災地住宅における「遊び」・「学習」などを通して、生活に根差したなかでの子ども集団づくりと、子どもを軸にしたコミュニティ形成支援	福島県

「私たち」のために 「私」のため

◎楠田健太(トヨタ財団プログラムオフィサー)



郡山夏の風物詩「うねまつり」の前夜祭イベント「郡山の太鼓」で

携しながら体験活動を企画。この活動を通して子どもたちは仕事の面白さや難しさを実践的に体験するとともに、自分の住む地域の魅力を発見し、愛着や親しみを持ってもらうことを目的としています。

今回訪れたのは、この体験活動の一環として企画された「魚市場・親子セリ見学会」でした。朝5時半から始まるセリに間に合うよう、朝4時に起床し、地元の潮彩市場へ向かいます。現地に着くと、帽子に長靴を携えた子どもたちが、親御さんたちとともに集まってきました。所狭しと並べられる獲れたての魚介類や、熱気あふれるセリの様子に、子どもたちは興味津津。眠い目をこすりながらも、普段自分たちが口にしていく魚が売られる様子を、熱心に観察していました。

このような体験活動を、各学校ベースでやるうとすると、早朝ということで引率する先生にも負担がかかる、市場としても一括で大人数を受け入れることができないなど、いくつかの困難な点があります。それを、於土井さんのような市民活動を担う人々が、各学校へのチラシやインターネットを通じて周知を徹底したうえで、関心を持つ子どもたちにこのような機会を提供するというのは、とてもよくできた仕組みだと感じました。

現在では、今回訪れた魚市場以外にも、美容院、カフェ、お菓子屋さん、服屋さん、八百屋さん、おもちゃ屋さんなど、市内12の店舗がこのプロジェクトに賛同し、子どもたちを職業体験の場として受け入れてくれています。そのなかで子どもたちは、商品を売買するという普段見慣れている部分だけでなく、店内を掃除したり、商品を陳列したり、あるいは実際に商品を作ったりと、一連の作業を実体験すること



子どもたちは、市場の方のレクチャーに熱心に耳を傾けていた

で、仕事について、社会の成り立ちについて思いを馳せます。店の人にとっては、それまで接することのなかった地元の子どもの

たちとのコミュニケーションの場となり、彼ら・彼女らに仕事を教える経験を通じて、改めて自分の

梅雨が明け、東京では記録的な猛暑の続いた7月下旬から8月上旬にかけて、贈呈式(本誌32ページ参照)やシンポジウムの合間を縫って、東は岩手から西は宮崎まで、国内助成プログラム担当者として、各地で行われている助成プロジェクトの現場を訪ね歩くことができました。今回はそれらの中から、三つのプロジェクトをご紹介します。

【訪問先】
山口県防府市
【助成題目】防府市子どもの職業体験事業[dCLUE]夢のヒントを見つけよう!



「魚市場・親子セリ見学会」参加者の皆さん
[dCLUE]とはこの職業体験事業の総称で、この活動に参加した子どもたちに渡される地域通貨の単位でもある

仕事や社会の成り立ちについて体験が「学ぶ

最初におじゃましたのは、日本三大天神の一つ、防府天満宮で知られる山口県防府市。人口は約12万人、山口県のほぼ中央部、南を瀬戸内海に面し、かつては交通の要衝でもありました。現在防府は、大型店舗や近隣周辺市との競争激化による中心市街地の空洞化、四年制大学がなく就職先も限られることによる若者の流出、全国平均よりも早い速度で進行する少子化・高齢化など、さまざまな課題を抱えています。

そんななか、本プロジェクトの代表者・於土井豊昭さん(NPO法人市民活動さぽーとねっと代表理事)を中心に取り組んでいるのが、市内の子どもたちの職業体験事業です。本プロジェクトではまず、商工会議所の助けも借りながら、域内の企業を対象に子どもたちの職業体験の受け入れに関するアンケート調査を実施しました。調査結果についてはホームページなどで情報発信し、この結果を参考に各社と連

仕事を捉え直すきっかけとなるばかりか、後日受け入れた子どもたちの親御さんたちがお礼がてら買い物に立ち寄ってくれて売り上げにもつながるなど、地域のなかで思わぬ波及効果も呼んでいるようです。

【訪問先】
宮崎県都城市
【助成題目】吉之元じじばば里山ファームで地域共生プロジェクト——中山間地域の福祉特区モデルを目指して



町の集会場

中山間地域社会の生活支援モデルとして

次におじゃましたのは、宮崎県は都城市。県の南西端に位置し、南北に大淀川が貫流、東に鰐塚山地、西に霧島連山を臨む自然豊かな地域です。人口は約17万人を数える県内第二の都市ですが、本プロジェクトが対象とする吉之元町は、市内中心部から車で約40分の距離にある中山間地です。吉之元の人口は約600人。半数を65歳以上の高齢者が占め、少子化や高齢化、地元商店の閉鎖などに伴い、集落機能の低下までも危惧される典型的な中山間地域といえます。

本プロジェクトは、町の有志で発足した「吉之元よかとこ発見塾」(代表・門松一男さん)のメンバーが中心となり、住民自らの手で、外部から人を呼び込み、地域を活性化させる仕組みの構築を目的としており、具体的には、地域内の里山を整地しパークゴルフ場を整備、米やコーヒーといった特産品のブランド化などを実施しています。

私が現地に訪れた日はちょうど、プロジェクトメンバーが町の集会所に集まり、プロジェクトの進捗や今後の展望について話し合う月

*【国内助成プログラム(旧地域社会プログラム)】「人がつながり、地域が動く—共に拓く私たちの未来」をテーマとして、地域の特性を踏まえつつ、人びとの主体性をつながりを育み、社会の抱える多様な課題の解決に取り組むプロジェクトを支援する助成プログラム。



メンバーの手作りによる、ご自慢のパークゴルフ場。現在9ホールまで完成したが、最終的には18ホールまで作るとのこと

一度の会合日でした（というより、先方が私の訪問に合わせる本来の予定を二日はかりずらしてくれましたが）。

メンバーのほとんどは70代、80代のおじいちゃん、おばあちゃんなのですが、その元気な姿にまず驚かされます。和気藹藹としながらも、お互い言い合いを言い合う喧喧諤諤の議論はとても真剣なものでした。

この日特に話題となったのが、懸案であったよかとこ発見塾のウェブサイトに。試作版の出来を見ながら、コンテンツの項目や改善点について活発な意見交換がなされました。

昨年4月にこのプロジェクトが開始してしばらく後に、当初の計画で人件費への充当を予定していた約40万円を、別の費目に振り替えた旨の申し出が財団側にありました。結局その費用は、プロジェクトメンバー皆さんの合意のもと、パークゴルフ場の整備費や特産品の開発費に充てられることとなります。人件費を削ってまで地域の課題を解決しようとするメンバーの心意気はもろろん素晴らしいのですが、一方で、そのモチベーションだけを頼りに自転車操業でプロジェクトを運営するというのは、どこかで限界が来るということも事実です。

幸いこの活動には、地元の熱心な社協（社会福祉協議会）の担当者をはじめ、大学の研究者や市の職員、社会福祉士や医療関係者といった心強いサポーターをも徐徐に巻き込んでいる様子。そのようなつながりをも一つのプロセスと捉え、社協の職員にして本プロジェクトの連絡責任者でもある田村真一郎さんは言います。

「主役である高齢者の方々の知恵と経験を最大限に活かした、中山間地域社会の生活支援モデル（吉之元モデル）を全国に向けて提言したい」

今後の行方が、大いに楽しみなプロジェクトの一つです。



本番の「郡山の太鼓」では、見事な演奏を披露してくれた子どもたち

るリスクをも最小化できます。

またこの「こまち太鼓」は、演奏にあたってリズム感はもちろん、阿吽の呼吸で皆の間を合わせるために、見ることも聞かせることも、他者との協調性や集中力など、まさに総合的な力が必要とされます。さらには、この活動を通して地域が育んできた伝統的な文化を継承していく「地域にねざした保育」を実践できるということで、幾重にも

仕掛けられた上手いアイデアだと感じます。実際、年少の子どもたちは、来年は自分も憧れの太鼓を叩きたいと熱望し、保育所を単立していく年長の子どもたちは、小学校に上がっても太鼓を続けたいと口を揃えて言うとのこと。国内助成プログラムが掲げる「継ぐ」「つくる」「つながる」という素敵な循環が、ここでもできつつあります。

私が保育所を訪れた日は、この「こまち太鼓」が、郡山夏の風物詩「うねめまつり」の前夜祭イベント「郡山の太鼓」で披露される本番前日。保育士の先生たちは、子どもに太鼓を教えるにあたって、地元の講習会を数カ月にわたって受講しているとのこと。先生たちも子どもたちも、表情は真剣そのものです。翌日の本番では、懸念された雨も降らず見事に晴天。お化粧をしておしゃれをした子どもたちは、駅前に集まった数百人にのぼる観客の前でも物怖じすることなく練習以上の出来栄を披露し、その豪快な音色は郡山の夕空に響き渡ったのでした。

起「こまち太鼓」たか「こま」そ可能とな「た」

今回ご紹介した三つのプロジェクトは、いずれも子どもや高齢者といった特定の層を対象としたプロジェクトとなりました。国内助成プログラムの助成プロジェクトが対象とするテーマは、それ以外にも多岐にわたります。そうした各々の地域が抱える多様な課題群の解決に向けた取り組みに単一的な処方箋などありませんが、いくつかの必要条件を挙げることはできるでしょう。

【訪問先】
福島県郡山市

【助成題目】「こまち太鼓」で地域のつながりを再生し被災児の屋内保育をサポート！



「こまち太鼓」を実践する西田保育所

不安定な状況下、夕空に響き渡る太鼓の音色

最後におじやましたのは、福島県は郡山市。県のほぼ中央部に位置し、人口は30万人を超える中核市でもあります。この地で活動するプロジェクトに、トヨタ財団は今年4月より、東日本大震災対応「特定課題」の枠組みで助成しています。

昨年の東日本大震災において、内陸に位置する郡山は、沿岸部に比べると比較的被害は少ないように見えますが、震度は6弱を記録、建物の損壊やそれに続く原発事故の影響は今も残ります。特に原発事故では、放射能に対する明確な安全の基準が定まらない不安定な状況のなか、子どもたちの保育施設では、屋外での活動が大幅に制限されているため、屋内での保育活動が中心にならざるを得ません。

一方で子どもたちの保護者のなかでも、屋外活動による放射能の健康被害を懸念する保護者と、屋外活動の制限が子どもたちの心身の発達に及ぼす影響を心配する保護者とが混在し、各保育施設は対応を迫られています。そこで地元の保育所の保育士さんや研究者たちが立ち上げたのが本プロジェクト。この地に伝わる伝統的な「こまち太鼓」を改めて見直し、保育活動の一環として取り入れることとなりました。

中心となって取り組みを進める西田保育所で、実際に私も太鼓を叩かせてもらいましたが、わずか数分で服は汗でびしょり。想像していたよりもはるかにエネルギーを使う全身運動です。この活動を通して、屋内であっても全身運動が可能となり、かつ屋外活動の制限によ

まずはテーマとなる活動に対して、研究者や行政、家族や商店街や企業家など、適切な広がりをもつさまざまな立場の人々が多角的にプロジェクトに携わり、柔軟な協働体制を築いているということ。同時に、一見それとは相反するようですが、プロジェクトの核となる人や組織の主体性が充分に発揮され、その情報の発信が自覚的・定期的になされているということ。これらはともに不可欠だと感じます。

特に、今回おじやましたプロジェクトは、それぞれの活動の主役となる人々が存分に力を発揮しながら、彼ら・彼女らを温かく見守るおらかな包容力のようなものを地域全体から感じることができました。もちろんプロジェクトに協力している一人ひとり、自らの損得勘定で動いているわけでは決してありませんが、こうした活動が巡り巡ってやがては自分たちの暮らす地域のためにもなるという相乗効果を、直観的に感じ取っているのかもしれない。防府の於土井さんからいただいた「私たち（We）のために行うことが私（I）のため」という印象的な言葉が、それを端的に表しています。

旅の最後の訪問地となった郡山で、西田保育所の保育士さんたちが語ってくれました。「震災がなかったら、ここまで子どもたちのために何ができるか考えることもなかった。屋外での活動が制限されてなれば、単に子どもを外で遊ばせるだけで終わっていた。震災をきっかけに、一人ひとりの子どもたちとより深く向き合うことになったし、自分の仕事について改めて振り返るきっかけとなった」

震災は、もちろん起こらなければそれに越したことはない不幸な出来事ではありましたが、起こってしまったからこそ可能となったこともありうる。——この力強いメッセージから、奇しくも本誌今号の巻頭言（2ページ参照）を飾った「ビルド・バック・ベター」という思想が、ここで体現されつつあるのだと感じました。

これは被災地のみに限ったものではありません。防府の事例にせよ、都城の事例にせよ、今後日本全体や国外の各地域が遠からず直面するであろう課題を先取りして取り組んでいる試みであるとも言えます。そのような意欲的な活動を、財団としてどのようにサポートしていくのか。助成対象者の皆さんにひたすら教わることであった慌ただしい出張行脚を振り返りながら、思いを新たにしました。

も

う10年ほど前のことである。小学校
中学年の娘と低学年の息子を連れて、
家族で在外研究にでていたアメリカ・ニュー
ジャージー州プリンストンの、とあるショッ
ピングセンター内の「日本料理屋」に招かれ
て行ったことがある。そこで、ベトナム人と
おぼしき給仕係の女性がインドネシア風の
料理をテーブルに運んできてくれていたとき
のことだ。「日本料理、懐かしいでしょう?」
ときかれて、答えに窮していると、たまたまか
けるように、相手はこう言ったのだ。「私はね、
いつも父に言われていたの。外国からきた人
には優しくしてあげなさいって」

上から目線で満足そうに笑みを浮かべたそ
の人の顔を見たとき、私は急に悟った。息子
と同じクラスの親御さんから、帰国前に一度
ぜひ食事をとられて、あまり交流のなかつ
た家族からなぜお誘いが来たのかと戸惑いな
がらも、せつかなのでとランチに出かけた
のであったが、そのときも、どうも相手は
「困っている外国人」に親切にしてあげたい
という気持ちだったのだ。確かに息子は、最
初英語がまったく話せず、もしかしたらクラ
スメートから見れば「かわいそう」だった面
もあるのかもしれない。しかし、帰国前のそ
の頃には、なんとか英会話を始めており、同
級生の友達もそれなりに大勢できていたのだ
し、私も惨めな思いをしていただけでもな
かった。そんな的外れな親切心に、居心地の
悪い思いをしたものだ。

しかし、思い返してみれば、ありとあらゆる
ことで異文化体験をした一年間だった。子

ある。ある家庭では、日本人の父親と、メキ
シコ人の母親の間に生まれた女の子が、三つ
の言語の習得を行っていた。毎日の生活で、
母語としての英語がどんどん上達していくな
かで、父親は「幼い頃に英語で話しかけてい
たことを悔い、できる限りきれいな日本語で
話しかけるよう心がけているが、なかなかも
う追いつかない」ということだった。

フランス人の子女などは、本国で用意され
た母語を学習するための教材が渡されてお
り、誇りをもって母語を習い続ける仕組みが
整っているのに対し、日本にはそのような制
度はない。そんな仕組みがあることを羨まし
く思う一方、これからの時代のリテラシーの
ありようを考えると、外国で暮らす日本につ
ながりのある子どもたちが、日本での受験を
考えない場合には、多大な苦勞をして漢字を
正確に書けるようになることより、漢字が読
めてワープロが使えることにシフトした方が
合理的ではないか、と考える親たちの気持ち
もまた、むべなるかなとも感じられた。

こうしたアメリカでの日本につながるの
ある子どもたちの、日本語学習のさまざまな側
面を見聞きするうちに、自分のルーツのひと
つとなる母国語に文化的アイデンティティを
もとめることの言語のもつ意味合いの深さ
を、改めて思い知ることになった。

多

言語・学校プロジェクトは、多言語の
お知らせ文書や、用例集、語彙集、教
材など教育現場の多言語資源の共有・活用の
仕組みづくりを情報技術によって実現するこ
とを目指した。プロジェクトは、学校現場で

「私」のまなざし 4

文化的アイデンティティと 多言語活用の中で

文・写真◎喜多千草

2008年度アジア隣人ネットワークプログラム助成対象



カリフォルニア州で日本語を学ぶ児童・生徒に、漢字学習
アプリケーションのデザインをしてもらっているところ



「多言語・学校プロジェクト」で制作されたツールの一般公開前
に、小中学校の教師を対象として行われた研修



「多言語・学校プロジェクト」ウェブサイト
<http://www.tagengo-gakko.jp/>

どもを学校に入れる際にスクール・ナース(保
健室の先生)と面談をしたが、「ピーナツ・
アレルギー」は尋ねられても「大豆アレ
ルギー」や「蕎麦アレルギー」などは聞かれも
しなかったり、「親子遠足」のお知らせを
もらったので、ハイキングの格好をして集合
時間に行ってみたら、自分と韓国人のおかあ
さんの二人しか親は来ていなくて、「あんな
お知らせが学校から来たら、親は参加するも
のだと思いますよね」と慰め合ったり、それ
はいろいろなことがあった。

こうしてその一年の間に、言葉のわからな
い外国で暮らし始める子どもたちのストレス
や、学校文化の違いに戸惑う親の気持ちを
知った。アジアから来たマイノリティとして
扱われる経験もしたし、ありがたい思いやり
に心温まったこともあった。この外国に移り
住む家族の側としての経験が、「多言語・学
校プロジェクト」を始めるときの、私の原点
である。

そ

その後、プロジェクトの途中で、今度は
西海岸で単身で在外研究を行う機会が
あり、このときは、アメリカに定住しようと
している日本につながるのがある子どもたち
になった。どの家庭も漢字学習に四苦八苦
していることを知り、子どもたちが好きな知
識パズル系のゲームをヒントに、漢字の部首
を覚えやすくするためのゲームをつくって、
試しに使ってもらったりもした。それにして
も印象的だったのは、第二の母語としての日
本語をいかにして定着させるかという苦勞で

教育に実際に携わる方たち、教育委員会関係
者、大学の研究者、NPO関係者など多様な
メンバーで構成されていた。さらに、製作し
た「文書検索ツール」へのリンク了承の願
いを通じ、多くの機関とのつながりができ、
ネットワークが広がった。将来的な課題とし
ては、より多くの言語に展開してゆくことと、
学校と家庭のコミュニケーションにあたり、
家庭の側から学校への連絡についても支援し
てゆけるようなリソースの必要性に対応する
ことである。

日

本で、日本語の運用が困難な児童・生
徒やその家族に対して、母語を学ぶ機
会を確保したり、対等なコミュニケーション
を開こうとしたりするとき、機械にできるこ
とはわずかしかない。しかし、母語が話せる
サポーターが忙殺されるお知らせ文書の翻訳
等にかかる時間を軽減するため、情報共有の
仕組みを作ることなら機械が得意とするこ
ろだ。こうして生まれた「多言語・学校プロ
ジェクト」の成果は、いま文部科学省の「か
すたねつ」として引き継いでいただき、永
続的に運用されている。母語で学習や学校生
活の支援をしてくださるみなさんが、少しで
も多くの時間を児童・生徒の支援に割いてい
ただくことに貢献できているのであれば、プ
ロジェクトに関わった者としてこれ以上の喜
びはない。

●きた・ちくさ(関西大学総合情報学部)

2008年度アジア隣人ネットワークプログラム助成対
象「情報基盤技術で支える教育現場の多言語利用環境」
アジアの移民を受け入れる多文化共生社会の実現のため
のネットワークづくり

こうだ まさき
合田 正樹
(2010年度 地域社会プログラム)

【題目】若者が農村を変えるアグリアイデア推進プロジェクト

【プロジェクトチーム名】アグリアイデア・ネット

【助成概要】近年、「食育」の言葉も身近なものとなり、農業に関心を持ち体験を希望する大学生・若者が増えている。私の農場でも、2年前から農業コーディネート会社と連携して、大学生をはじめとする研修生の受入れを始めた。当初、経営者の私は彼らを「農繁期に必要な労働力」という観点で考えていたが、研修を通して共に汗を流し、会話をする中で「未来の農業のアイデアは彼らの中にある」と感じる様になった。確かに経験の浅い彼らの発想は、現状では実現が困難な「夢」の部分が多い。しかし反対に農業者として経験を積んだ私の発想は、リスク回避を重視するあまりアイデアが固定化され、チャレンジングな部分が少ないことに気づかされた。そこで自由な発想とチャレンジ精神も旺盛な若者達を農村に招き入れ、協働型農業研修を実践し、若者は「自分の方向を探すために」、農業経営者は「新たな農業を探すために」、お互いにアイデアを出し合い、未来の農業を語る環境・仕組み作りを本プロジェクトの目標とするに至った。

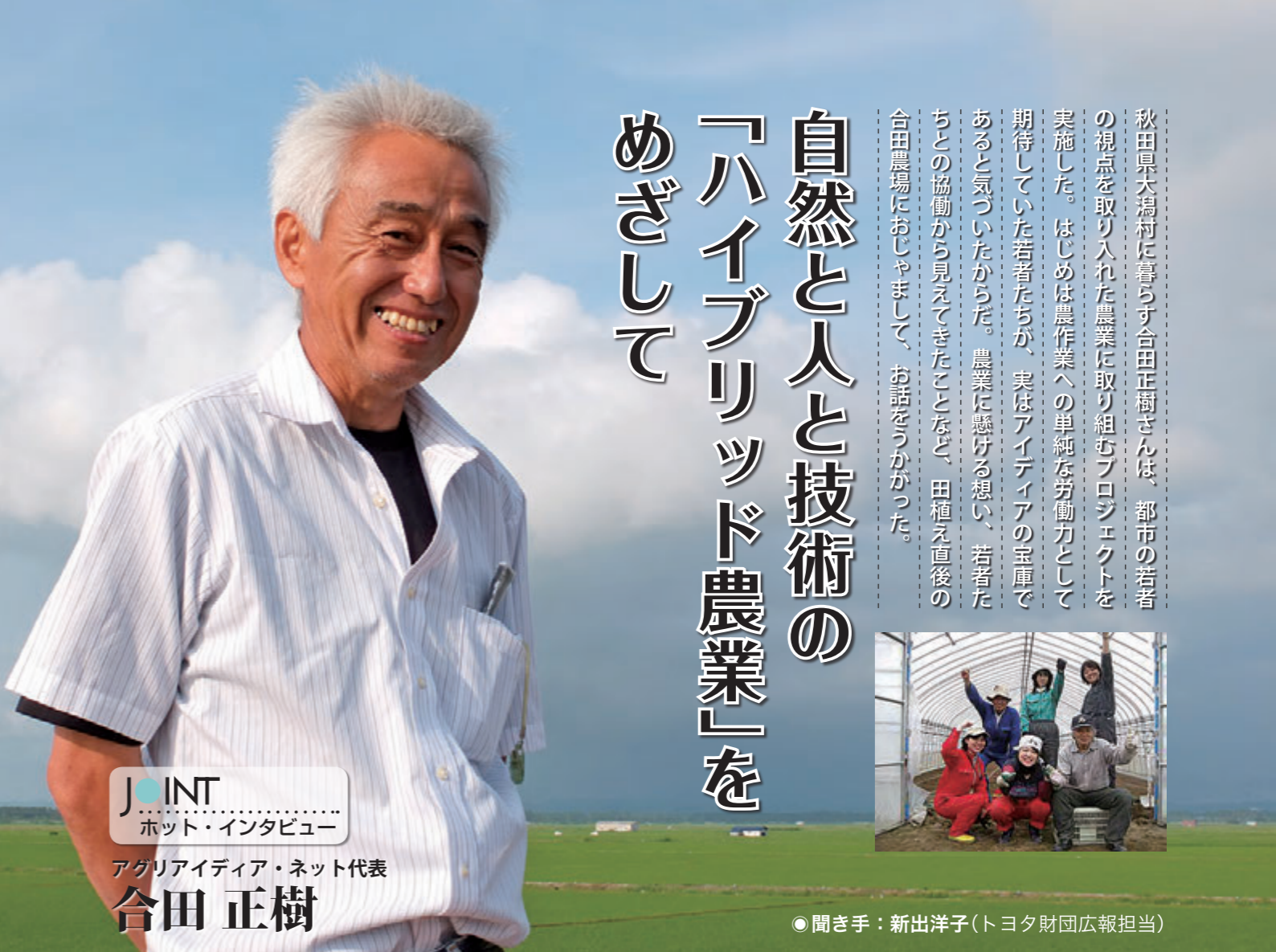
実際の協働研修では宿泊や食事などの生活面が大きな課題であり、現在、自費で自炊型の宿泊研修施設を整備している。将来的には、その施設を拠点に地域の農家と協力しながら受入れを実施し、且つ継続するための資金面の確保も目指していく。

秋田県大潟村に暮らす合田正樹さんは、都市の若者の視点を取り入れた農業に取り組むプロジェクトを実施した。はじめは農作業への単純な労働力として期待していた若者たちが、実はアイデアの宝庫であると気づいたからだ。農業に懸ける想い、若者たちとの協働から見えてきたことなど、田植え直後の合田農場におじゃまして、お話をうかがった。

自然と人と技術の「ハイブリッド農業」をめざして



●聞き手：新出洋子(トヨタ財団広報担当)



JOINT
ホット・インタビュー

アグリアイデア・ネット代表

合田 正樹

たとしても、心理的な距離は遠いと感じていたんですよ。便利な交通は都市と都市を結んではいないので、その間に存在する農村は心理的にはその先にあるくらい遠い感じかなと。就農を進める制度もいっぱいあるんですけど、1年2年雇うことはできても、そこから若い人が家庭を持って子どもを育てて……、となっていくと昇給とか考えないとなりませんか。現段階では無理ですが、そういうことができるよう、現在いろいろと方法を模索しています。

——実際にプロジェクトとして進めてみてどうでしたか？

まずは学生によって、時間の使い方とか工夫の仕方が違うなというのを感じました。興味関心はあるけれどもまったく農業体験がない学生も来ますから、受け入れ側も個別の学生に合わせてレベルを考えないといけないくて、それを酌んでカリキュラムを作るのが結構

構大変でしたね。学生には、一つの作業がその後、農作業全体のどの部分につながっていくのかということを言葉で説明はしますが、言葉だけでは実感が湧かないというのはありますからね。それはやはり、受け入れ側が積極的に努力をするべきポイントかなと思います。そういうところを双方に教えてあげたりステップを作つてあげたりしないと、どちらも欲求不満になってしまいうるなと思いました。

このプロジェクトを始めるにあたって民泊はしないと決めていたので、学生たちにはホテルに泊まってもらっていたのですが、それだと自炊ができないので結局農家の方でお弁当を用意したりしなくてはいけなくて、それがちよつと大変だったので、次の年からは研修センターに泊まってもらいました。

そのうちにちよつといい物件が出たので、そこを買って自分たちの研修センターみたい

——合田さんが大潟村で農業を始められたきっかけは？

私は北海道、美瑛の出身です。元々親父が北海道で畑作をしていて、昭和45年に八郎潟の干拓地であるこの大潟村に家族で移住してきました。私自身は昭和57年から後継者として就農しています。もともと農業は好きでしたが、有機農業などにも興味があったので、自分なりにいろいろな試みが続けながら、今はお米を作つて個人で販売しています。

大潟村は半分くらいが秋田からの入植者、次いで北海道から来た人が多いです。人口は3000人くらいで、面積としては山手線がすっぽり入っても余るほど大きいんですよ。町の中は、農地、居住地、農舎、行政・教育施設など全てが区画分けされていて、整然としています。ほとんどの人が農業で生計を立てていますね。干拓地なので地盤が軟らかく、平坦なことも特徴だと思います。

——助成プロジェクトでは若者と農村をつなぐということでしたが。

今の農業の経営的体力では通年雇用が難しいのですが、農繁期はとにかく忙しいので、アルバイト感覚で手伝ってもらえる人手が欲しかったんです。でも受け入れを進めるうちに、彼らの就職や将来に対する不安も感じましたし、農業に対して興味を持っていることも感じましたので、こちらとしてももっと農業の現場を知つて欲しいとの思いが強くなりました。

都会と農村の距離を縮めたいというんでしょうか。地理的には農村が都会の隣にあつた宿泊施設を作ることができ、その点では研修と生活を切り離す事は一応の成功をみたと考えています。研修生からも、今までのいろいろな研修に参加してきて、仕事の連続だけだったり、単に見学や体験だけだったりと偏っていたけれど、今回は研修生活の中に両方が入つていたので、充実感がありましたと言ってもらえたことが嬉しかったですね。

——どんなことに苦労が多かったですか？

難しかったのは、農家と学生のコーディネイトですね。農家も若い人に来ては欲しいんですよ、研修とかも受け入れたいし。ただ天候に左右される仕事なので、研修や体験のスケジュールが組みにくいというのがネックになったりもするんです。たとえば種まきをこの日にするつて決めていても、天候のせいでも1日伸びたり1週間伸びたりつていうのはよくありますから、まず日程が組みにくい。それから農繁期は分刻みのように忙しく動いているので、そこで学生さんの生活の面倒を見たりすると、かえつて戦力が落ちたりしちゃうんじゃないかって心配する農家さんも多かったんです。だからこそ、民泊はしないつて決めていたんですけどね。でも一度受け入れてしまえば楽しさとか方法がわかるので、また来年もつて言ってもらえるんですけど、そこまでいくのがやつぱり大変でした。

あとは農業は経験値頼りでその時々判断が必要な場合が多いので、どうしてもその点では学生さんたちの戦力は低いですよ。でも、一緒に作業することは楽しいと感じまし

たし、農業を知ってもらえることが嬉しかったです。

学生側のコーディネートは、以前から知り合いだった株式会社NOPPOの福本由紀子さんにお願いました。福本さんとは農業に対する考え方が同じ方向を向いていると感じたんです。ただ立場としては、彼女は学生のコーディネイトだし、私は農家側だし、やっぱり立場が違うので意見が食い違うことは出てくるんですけど、でもすべてをぶつけて話し合えたので良かったです。時々自分はどういう立場で動いているんだろうという感覚になることもありましたけど、だんだん慣れてきましたね。現在は「明日の農業を楽しくします」を合い言葉にしてさまざまな視点を探しながら、小さな変化と経験を積み上げていきたいと考えています。

余談ですが、農業や地域の活性化のためにはいわゆる「ヨソ者」の感覚が必要ですし、その感性が変化を生むと思うんです。農作業は少なくとも1年を1サイクルとする仕事で、結果が出るまで時間がかかるんですよ。スパンの長い仕事なので、ややもすれば変化が乏しくて、安定感重視に陥り易くなってしまう。でも時代はどんどん変わっているんで、農業も変化に取り残されないように感性を磨く必要があるんです。日本の農業は先人たちのおかげで確かに先進的な農業ですけど、今は世界的にも天候に左右されない農業が確立されつつあって、農業に携わる人間としては、現状に甘んじてはいけなないなという思いがあります。小面積の日本の農業

のためにも、豊作・不作に一喜一憂する農業からの脱却を目指さなくてはならないと考えるようになりました。

——若者の受け入れ前と後で何か変化はありましたか？

若者はアイデアと感性の宝庫である事は間違いないというのは実感しました。でも、そのアイデアを実現するためには数々のステップと経験が必要ですし、それが我々経験者の仕事だなと思いましたね。若者たちはその経験値の少なさからなのか、決断することを苦手としているようなところもあると思うので、そういう責任を伴う決断は経験者が受け持たなければいけないっていうのも学びました。修復可能な範囲であれば、失敗を恐れず自由に試してみたいというのには伝えていきたいですし、その後ろ盾になりたいです。若者と経験者がお互いを補い合って気持ちをかみ合わせれば、大きな力となるはずと確信しましたからね。

それから、田舎は住みやすいですが、新しいことを始めようとするのは結構大変な部分はあるかなと思うので。新しいことのために何かしようと動こうとしても、動く手段が見つからなかったりするなかで、今回みたいな助成金というチャンスをいただけて、前に進めたというのがとても大きかったです。人脈が広がったり、活動の範囲が広がったり。その一つが商品開発です。

——商品開発について教えてください。

商品開発の市場調査のために、学生たちに

らない。「植物工場」っていうイメージでしょうかね。ヨーロッパの方ではこういうシステムで3〜4倍の収穫を得ているという話もあるので、これはポーっとしていられないぞ、と。日本は農地が狭くて限られた面積ですからね。日本の農業技術でぐっと成長しきってしまっって、20年前くらいからあまり変わっていない気がするので、人の技術と自然をハイブリッドするっていうことを考えていきたいのです。もつと、電気とか工業技術が農業に入ってきてもいいんじゃないかと思うんですよ。

農家って経験値でやってしまっているもので、新しい人に伝えられるマニュアルみたいなものがないのですが、今、そういうのがほしいなって思っています。そういうこともあって、機械的にデータを残せたりするようにしたいです。最低でも仕事を覚えるまでに3年、判断ができるようになるまで5年くらいはかかりますからね。こういう工学的な面からも農業に興味を持ってくれる若者が増えたらいいなと思っています。

今後の目標としては、太陽光を利用して、自然環境をうまく利用した形で豊作不作に左右されない農業を目指したいという意味で、水耕栽培のハウスをもつと植物工場的にしたいですね。水耕栽培を成功させたいっていうのは夢で、今それに向かって活動できているので、とても充実しています。

——最後に、若者たちにメッセージをお願いします。

大潟村って冒険者精神というか、今一線

道の駅でほしいと思うものを自由に買ってもらったら、なかにバジルソースを買ってきた人がいたんですよ。私の感覚ではピザについてきても食べようとは思わない感じだったので、それが新鮮で、他の学生にも聞いてみたら意外とバジルを好きな人が多くて。それでバジルソースを作ってみようということになりました。加工実習にあたっては、秋田県の総合研究所のご好意で協力していただくことができました。企業向けの開発を援助する場所なのですが、学生と一緒に商品開発をするって言ったら、面白そうだから1回は付き合おうって言ってもらえたんですよ。加工のレシピは総合研究所さんが大体作ってくれて、あとは自分たちで研究しなさいって。それで、バジルを栽培して加工するまでは去年

なんとかできました。バジルは変色が早いし香りが飛びやすいので、そこはとても大変でした。学生さんが考えてくれた「若さ、香る」という名前前で商標登録をとって100個販売しました。バジルの新芽の香りと、学生たちの澆刺とした若さを名前に掛けています。

商品開発についても、変化に即して活かされる助成金っていうのが嬉しかったですね。自由度の高さは本当に助かりました。助成金をいただけたことで、後押しをしてもらっているんだという自信にもなりました。

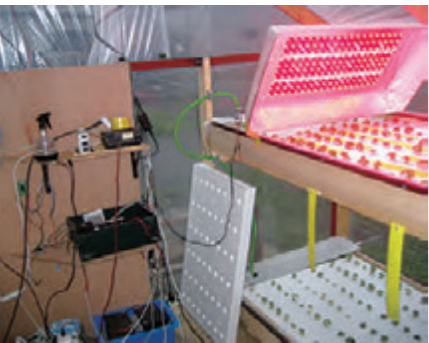
——今後はバジルソースの改良や販売などを進めていけるのですか？

大潟村は冬とても寒いので、バジルの生育地としてはあまり適していないんですよ。本来ならここで諦めた方がいいって言うところ

動いている世代で身一つで入植してきた人たちの子どもだったりするので、チャレンジ精神があると思うんですよ。ソーラーカーの時もそうだったのですが、「ソーラーカーばか」って言われるくらい打ち込んでいたら、自分自身ではできないけど応援はするよって賛同してくれる人はたくさんいました。それが自信にもなったし嬉しかったです。それがプロジェクトも同じだと思っています。やりたいことを一生懸命やっているのを応援してくれる人ができて、学生たちはそれに応えるために頑張りますよ。だから学生たちには、一生懸命やっついていけば応援してくれる人が必ずいるからっていうのを伝えていきますし、そういう人たちの気持ちも一緒に背負ってやっついていけばいいんじゃないかって思います。

あとは先ほどの話の通り、リスク管理のことでしょうか。今の若い人たちには感性で協力してもらいながら、私たちは危険なことを察知する、それをお互い出し合っているものができたらなと思います。最初から諦めないでほしいというのはありますので、お説教にならない程度に注意をしています。農業って保守的というか農地法などで新規参入がしにくいくみになっ

ているので、難しいとは思いますが、農業が好きという人には頑張っ



ハイブリット農業の実験としてはじめた水耕栽培の試験温室

第1回 洗足カフェ

「JOINT Café」は、トヨタ財団の助成を受けられた方々を中心に、お互いの活動について、自由に語り合い、交流する場として企画しました。

7月14日(土)夜、梅雨明け前の蒸し暑さの中、東京都目黒区洗足にあるコミュニティカフェ「洗足カフェ」にて、本誌特別企画「JOINT Café」を開催しました。参加者は、当財団の助成を受けている方々を中心とした24名。1フロア20㎡強のカフェ内で参加者が肩寄せ合う会となりました。

「洗足カフェ」は、南房総と東京の二地域交流を通して、里山環境の保全と地域の活性化をめざす「NPO法人南房総リパブリック」が運営するカフェ、現在、当財団の地域社会プログラム(名称は当時。現 国内助成プログラム)の助成を受けて活動を進めています。今回の催しは、南房総リパブリックの方のご協力を得て開催することができました。

当日は、南房総リパブリック理事の和田夏子さんのキックオフスピーチでスタート。「洗足カフェのできるまでと里山との交流」と題

洗足カフェの階段を利用してみんなて記念撮影



して、洗足カフェ立ち上げにこめた思いをお話いただきました。立ち上げにあたって、全国のコミュニティカフェの事例を調査した和田さんは、「コミュニティカフェ運営にあたって「広がり」と「持続性」という点に課題を感じ、それを乗り越えるための運営方法を検討したそうです。

運営方法の特徴は、日替わりオーナー制度。毎日オーナーが替わることで、一人ですべて背負って開業するよりリスク分散となり、カフェの持続性につながることを期待されます。また、それぞれのオーナーが特徴のある店づくりをすることで客層に多様性が出て、広がり生まれます。

財団スタッフの他、20名の多芸多才な人々が集いました

者同士、協働で新しい企画を実施する具体的な話し合いなどもみられ、ここでの出会いが新たな活動の萌芽となったことは、企画者としては望外の喜びです。

今、全国でコミュニティカフェを立ち上げる動きが見られます。コミュニティカフェとは、地域における「たまり場」「居場所」としての機能を持つカフェのことを指します。かつての地域共同体では、縁側や路地裏、神社の境内などが集まり情報交換をする場面が多くみられたといえます。

現代の社会では、暮らし方や地域共同体のあり方が変化し、地域における自由な情報交換の場が減ってきています。そうしたなかで、コミュニティカフェのような新たな場づくりに期待が集まります。かつての縁側とは違い、地域の内外から人が集まる場であり、開放的で広がりを持った現代的なコミュニティが形成される場です。今回の会も、小さなコミュニティが生まれるきっかけとなったのではと思います。そうしたコミュニティが幾層にも重なり合い、支え合うことが社会の豊かさや強さにつながるのではないかと考えます。

今後、誌面を飛び出し、直接人と人が出会う企画を考えていきたいと思っておりますので、ご期待ください。(トヨタ財団 喜田亮子)



洗足カフェ Senzoku Cafe

洗足カフェは、日替わりオーナーによるコミュニティカフェです。さまざまな特技を持ったオーナーが集まり、曜日ごとに違うお料理やお菓子をお楽しみいただけます。お気軽にお立ち寄りください。



☎ 昼 9:00-18:00(月)~(日) LUNCH 11:30~
夜 19:00-23:00 土曜のみ21:00迄 火・木不定休

☎ [TEL] 03-3710-2626
[URL] <http://senzokucafe.com/>

〒 152-0012 東京都目黒区
洗足 2-7-17 1F&2F



INFORMATION

東日本大震災対応「特定課題」へ夏助成Vの助成金贈呈式を開催

2 012年度東日本大震災対応「特定課題」は、へ夏助成V、へ冬助成Vと年2回の公募を実施します。今回助成が決定したへ夏助成Vでは、「活動助成(国内助成プログラム特定課題)」「政策提言助成(研究助成プログラム特定課題)」と2つの枠組みで公募を行い、「活動助成」186件、「政策提言助成」91



写真上：お話しされる中村安秀国内助成プログラム選考委員長(仙台市にて)。写真下：贈呈書授与を行う常務理事伊藤博士(右、遠野市にて)

中 村安秀選考委員長 (大阪大学大学院教授)

授)は、自身がアチエをはじめとする被災地で活動してきた経験を踏まえて「復興は、地元の人が主役。同時に、地元の人とよそ者のコラボレーションが生み出す物語でもある。そこか

件、合計277件の応募をいただきました。6月25日に開催された当財団理事会にて「活動助成」15件3280万円、政策提言助成9件3000万円の助成を決定しています(18ページ「プロジェクトマップ」参照)。

助 成金贈呈式は、7月24日、25日に宮城県仙台市(福島県との合同開催)、岩手県遠野市で開催。贈呈式は、はじめに選考委員会による選後評、その後当財団常務理事伊藤より贈呈書の授与を行いました。続いて、参加者による助成対象プロジェクトについてのプレゼンテーションがありました。

助成対象となったプロジェクトは、気仙沼市にて漁師が古くから使用していた「帆前掛け」や「帆布」を使ったバッグや小物を製作し新たな産業を興そうという試みや、原発事故の影響で医療人材が減少した福島県南相馬市にて、地域の保健医療体制の在り方について研究し、政策提言をする取り組みなど、地域や課題も多岐にわたっています。ただし、いずれのプロジェクトも地元を軸足を置きつつ、地域の外とも積極的にネットワークをつくっていくようとしている点が共通しています。

プログラムの応募状況

研究助成プログラム(一般枠)

昨年度に引き続き、「よりよい未来を築く知の探究」というテーマのもと「共同研究助成」「個人奨励助成」の2つの枠組みで公募を行いました。4月16日～5月18日の公募期間に「共同研究助成」385件、「個人奨励助成」495件の応募がありました。助成プロジェクトは、2012年10月上旬に開催される理事会にて決定する予定です。

アジア隣人プログラム

本年度は、国際支援のあり方を見直すための準備期間と位置づけ、1年限定の特別企画として「未来への展望」をテーマに、これまでのアジアにおける様々な実践活動の経験交流と、それにもとづくアジアと日本の未来に

公募のご案内

国内助成プログラム(一般枠)

10月9日～11月19日に国内助成プログラム(一般枠)の公募を実施します。国内助成プログラムでは、「人がつながり、地域が動く」

BOOKS



神の木
日・韓・台の巨木・老樹信仰

- 著者：李春子
- 発行：サンライズ出版
- 発行日：2011年11月30日
- 価格：4,000円 + 消費税

著

者である李春子さんは、トヨタ財団の研究助成による研究プロジェクトをはじめとして、10年以上にわたって一貫して「鎮守の杜」の研究を続けてきました。本書は、その成果を初めて公けに世に問うものです。内容は、2003年京都大学に提出された博士論文『東アジアにおける杜の信仰と持続——台湾、日本、韓国の比較』に、それ以降の継続的な調査で得た成果も含め大幅に加筆・修正がなされたもので、東アジア各国・各地別に、計100カ所以上の神木が全ページカラーで紹介されています。



知られざる森のゾウ
—コンゴ盆地に棲息するマルミミゾウ—

- 著者：ステファン・ブレイク
- 翻訳：西原智昭
- 発行：現代図書
- 発行日：2012年4月14日
- 価格：2,381円 + 消費税

わ

れわれが一般的にアフリカゾウと呼んでいるのは、サバンナに棲息するサバンナゾウで、マルミミゾウは、それより小柄で熱帯林に棲息しています。本書は、日本であまり知られていないマルミミゾウの生態や密猟の現実、保全戦略などが紹介されています。

トヨタ財団では、本書を翻訳した西原智昭氏の研究「象牙利用に関する日本伝統文化のあり方の再評価づけとアフリカ熱帯林・マルミミゾウの密猟の実態に関する研究」に2009年度研究助成プログラムで助成を実施しました。西原氏は、本書の最終章「マルミミゾウと日本人」にて、マルミミゾウ生存の危機と日本の関係について論じています。まずは、知ることが大切であると西原氏は書いています。その意味でもマルミミゾウについて網羅的に紹介された本書は、大きな役割を果たす一冊です。



Common Underwater Plants in Coastal Areas of Thailand

- 編著者：筒井功
- 発行：JIRCAS
- 発行日：2012年4月

本

書は、2006年度研究助成プログラムで助成を実施した研究プロジェクト「タイにおける藻場の生態調査ならびに海産植物図鑑の作製——生命のゆりかごを守るために(代表者・筒井功)の成果物の一つとして出版されました。本書が対象とするタイ沿岸部は、海藻・海草類の宝庫です。本書では、当該地域に生息する約120種類におよぶ海藻・海草類が、写真と解説文で詳しく紹介されています(筒井さんへのインタビューが本誌創刊1号に掲載されています。財団ウェブサイトでバックナンバーをご覧ください)。

全ページカラーで、解説文を英語とタイ語で併記するなど、現地の人々にも手に取りやすい工夫がなされています。入手方法等についてはJIRCAS(独立行政法人国際農林水産業研究センター)まで直接お問い合わせください。

*李さんに関しては本誌4ページからの「座談会」、下の西原さんは14ページの「寄稿」をご参照ください。

新出洋子 (トヨタ財団広報担当)



Photo by Yoko Niide

Photo by Kenta Kusuda

このところ、カメラ好きの財団職員にとって、出張の合間に地域ならではの写真を撮るのがひとつの楽しみとなっています。ここに紹介するのは、偶然、東北出張の折りに妖怪の変身ぶりをとらえた2枚。さしずめ、「東北妖怪二景・現代版」といったところでしょうか。

左は秋田空港で出逢ったナマハゲさん。夏向きにドレスアップしているところが気に入って、出会い頭に撮った一枚。クルマで空港から男鹿半島に向かう途中でも、いくつかナマハゲを目にしました。

右はご存知のカッパ。カッパといえば『遠野物語』。これは国内助成プログラムの担当者が、岩手県遠野の駅前でふと見かけた交番を撮ったもの。ウィンクしてるところがいいですね。

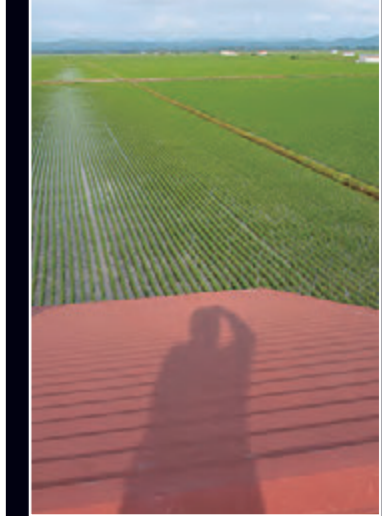
もともと東北は、伝説や昔話の宝庫。昔は妖怪や精霊などを通して、目に見えないものにする畏怖が人々の心にかきたてられていました。それが自然に感謝すると同時に、自然をそれ敬う文化を育ててきたのだと思います。あの意味では、善くも悪くも、コミュニティ内の子どもたちにたいする「戒め」としても機能していた面があるのでしょう。

そんな、伝承が育てた人々のメンタリティ。それが今風の意匠で、暮らしのなかのちょっとした場面を活かされているのを見ると、なんだかうれしくて、少しほっとした気持ちになります。みなさんは、どうですか。

● 今回はじめての誌面飛び出し企画として、「JOINT Cafe」を開催しました。後日参加者の一人から、普段の活動では出会えない人々と出会う刺激になったと感想をいただきました。

「JOINT Cafe」の主役は、参加者の皆様同士の熱いコミュニケーション、それに彩りを加えてくださったのが、おいしいお料理です。「冷やし煮物」、「とうもろこしの冷製スープ」など……、房総の夏野菜の味が活かされたお料理の数々。舌で季節を味わうことができました。洗足アリスエフの岩崎浩さんとスタッフの皆様は、この場を借りて改めてお礼申し上げます。みんなで同じものを味わうことは、人と人の距離を縮めてくれると実感！ おいしいお酒とお食事を楽しめる会をまた企画できたらと思います。[RK]

● 今号のホット・インタビューでは、合田正樹さんを訪ねて秋田県の大潟村を訪問しました。大潟村は戦後間もなくの時代に干拓が行われ、開拓者たちが切り拓いた土地です。今一線で活躍されている方々はちょうど二世世代。合田さんのチャレンジ精神旺盛な活動内容は、まさにフロンティア魂を受け継いだものだと感じました。学生



秋田県大潟村にて。屋根の上から視界一面の田んぼを見晴す [I.I.]

【編集後記】
LAST WORD

さんたちとの協働のことや、ソーラーカーのこと、ハイブリッド農業に関してキラキラした表情でお話してくださったのが、とても印象的なインタビューとなりました。ご協力、ありがとうございました。[NN]

● 研究助成という、知的な刺激を受け、さらには出張である程度自由に国内も国外にも足をのびせる寛容なプログラムを長きにわたって担当した後、今年から国内助成(旧地域社会)プログラムに異動を命じられました。

これまで直に触れたことなかった地域の人の熱い思いに、ときに気圧されながら、私も変わらずジコチューな自分を「私たちのためが私のため」(by 防府のO氏)と諫められて、プロジェクトをサポートする立場でありながら逆にサポートされつつ、ぼちぼち修行の道は続きます。どうぞよろしく。[KK]

● 何年も前のことですが、バリ島に行ったとき、山寄りのある小さな村にたっていたバ

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS

JOINT

ご意見・ご感想、また本誌送付先の変更等がありましたら、トヨタ財団ウェブサイト、あるいはファックスでご連絡いただくと幸いです。

JOINT [ジョイント] No.10

発行日	2012年8月30日
発行人	伊藤博士
編集	トヨタ財団 広報グループ
発行所	公益財団法人 トヨタ財団 〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1 新宿三井ビル37階 [TEL] 03-3344-1701 [FAX] 03-3342-6911 [URL] http://www.toyotafound.or.jp/
編集協力	石井 泉
デザイン	エディション・ヌース
印刷	文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

ニヤン(ガジュマル)の巨木に目をみはり、しばし時を忘れてその樹影に佇んでいたことがありますが。その木は、大地から空へ突き上げるような勢いがあり、まるで膨大な量の水を噴き上げる噴水のようにも見えました。文字通り圧倒されましたが、同時に癒されるような不思議な感覚に心身が包まれたことを覚えていきます。

人は、生きているうちに何度か、「これは」と思える木に出逢うものなのかもしれません。普段は意識せずとも、それらの木は記憶のなかに根をおろし生きつづけているものです。タルコフスキーやアングロプロスの映画にも、そんな忘れがたい樹木が出てきます。

巨大だからというばかりではありません。この前もなぜか、子どものころ住んでいた家の裏庭にはえていた小ぶりのイチジクの木を思い出していました。そういう木と人との出会いの機会が無自覚にうばわれてしまつたら、これほど悲しいこともないでしょう。「座談会」に同席してお話を拝聴しながら、そんなことを思っていました。[II]



公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION

<http://www.toyotafound.or.jp/>

JOINT No.10